

心しん

中ちゆう

宵せう

庚かう

申しん

解題

享保七年四月二十二日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松門左衛門(時に七)である。本曲は三巻に分れ、彼が世話物最後の作である。

實説

大阪新穀油掛町八百屋半兵衛・おちよの夫婦が、姑の虐待に堪へかねて、享保六年四月五日宵庚申の夜に家を出で、六日の夜明け方、生玉馬場先大佛殿勸進所の前で情死した實説に基き、また紀海音作「心中二つ腹帯」(本巻に)を参考して、技巧を凝らし脚色したものである。

本曲と「心中二つ腹帯」とを比較して、其の類似點を挙げれば、

- (一) 半兵衛の實家は遠州濱松で、武士の家柄であること。
- (二) 養家は大阪新穀油掛町八百屋であること。
- (三) 舅は人好であるが、姑は邪険であつて、半兵衛夫婦を虐待したこと。
- (四) 半兵衛が情死する前に、墓參の爲歸郷したこと。
- (五) おちよは夫の歸郷中に、姑に離縁を迫られたこと。
- (六) 養家の親の甥は、八百屋に懸り人となつて居り、半兵衛夫婦に同情したこと。
- (七) おちよは懷妊してゐたこと。

(八) 四月五日宵庚申の夜、半兵衛夫婦は家を出て生玉馬場先大佛殿勸進所の前に行き、赤毛氈を敷いて其の上に坐し、辭世の歌二首を残して自害した。其の時半兵衛は、おちよの抱帯を裂いて腹を引締めてゐたこと。また書置を狀箱に入れてゐたこと。これ等の類似點は、蓋し實説に據つたものであらう。

「脚色餘録」初編中の卷に、「谷町寺町大佛勸化所の門前にて心中せしは、丑年(享保六年)四月五日宵庚申の夜六日の朝の事なり。」「攝陽奇觀」卷之二十五ノ上、享保七年の條に、「四月五日、八百屋半兵衛お千代心中、宵庚申の夜生玉馬場先南都東大寺大佛勸進所に而死す、法名、霽秋禪定門、八百屋半兵衛二十七歳、風覺薰養信女、同女房千代、辭世二首、いにしへを捨てばや義理も思ふまじ朽ちても消えぬ名こそ惜しけれ、はる／＼と濱松風に揉まれ来て涙に沈むざざんざんざの聲、近松氏の戯文心中宵庚申、紀海音の心中ふたつ腹帯、かぶき狂言八百屋獻立などにて世俗よく知れり、新うづば油懸町の八百屋今に相續す、墓は八百屋伊右衛門且那寺下寺町稱念寺にあり」とある。「心中二つ腹帯」が享保七年四月六日上演されてゐるから、半兵衛夫婦の情死の當日に上演される筈がない。よつて享保七年といへるは、享保六年であらねばならぬ。又二十七歳といへるも、三十七歳の誤であらう。

西澤李叟撰「傳奇作書」拾遺上の卷に、「大坂新敷町の八百屋半兵衛嫁お千代と心中情死したるを、直に宵庚申として出せしは誰もよく知りたる事にはあれど、予幼少の時新敷の老人の語に聞きしは、實説も淨瑠璃の如く、唯遺ひあるは、八百屋の姑婆には虫も殺さぬといふ程のよき人なり、伊右衛門といへる老人も、あながち悪人ならねど、兎に角若い女好みにて、下女屋女を孕ませる事度々にて、嫁お千代を口説く事甚しければ、姑に之を告ぐれど、まさか男の半兵衛には此事もいひかね、年月過す内、半兵衛は用事あつて遠方へ行き、長らくの留守中なれば、舅伊右衛門かかる折にこそ本望を達せんとてか、晝夜とも透間さへあれば嫁を口説く、老婆之を氣の毒に思ひ、常盤町の伯母の方へ預け、世間の人の問ふ時には、連合の悪性よりは言はれず、よん所なく嫁の身持家風にあはぬ故預けしなど答へけり、半兵衛歸宅の上は、子細なくお千代も呼戻せしが、伊右衛門ます／＼煩惱の犬の如く、人目をかまはず口説き、聞入れざるを根にもちて、養子半兵衛少しの仕あやまちも仰山に罵りけるにぞ、老婆も種々と諫言しけれど、伊右衛門はなほ逆立ち物言ひの絶えぬ故、義理にせまつて暇を出し、宵庚申の夜遂にはかなき情死したりとぞ、淨瑠璃に書く時には、老婆を悪人にせぬ時は憎み増さぬ故にや、門左衛門の作意より、善人かへつて悪人と言はるるも、老婆の不幸なるべし」とある。「傳奇作書」の中には信じ難い事が多々ある。この記事も其の一である。

「浪華人物誌」卷之三に、半兵衛の舅仁右衛門が死んだ後、手代の作藏といふ者が、後家を籠絡して情を通じ、又半兵衛の妻お千代に横戀慕し、半兵衛を放逐しようとして、後家に半兵衛を惡しざまにいひなし、後家と共に半兵衛夫婦を虐待した。それで半兵衛夫婦は堪へかねて家を出で、宵庚申の群集の中に紛れて生玉に彷徨ひ行き、大佛勸化所の門前で縊死したとある。この説は後人の附會したもので、元より信じ難い。

影 響

豊竹座では、おちよ・半兵衛の一周忌を當込んで、享保七年四月六日から、紀海音作「心中二つ腹帯」を上演して盛況であつた。これを見た竹本座でも、同じ事柄を仕組んだ本曲を、同年四月二十二日から上演した。が立後れであつた爲に、豊竹座に機先を制せられて振はなかつた。

「脚色餘録」初編中の卷に、「寅年(享保七年)四月六日より豊竹座紀海音作にて、(おちよ・半兵衛)心中ふたつ腹帯を出す。同四月二十二日より竹本座近松門左衛門作にて、(おちよ・半兵衛)宵庚申を出す。然れば同年同月に淨瑠璃出て、十六日違ひ、竹豊兩座張合に出せしなり。ふ

たつ腹帯にはお千代の年二十四と有つて、宵庚申には二十七と有り。半兵衛の年は三十八なり。兩座の狂言上の巻の趣向は變れども、八百屋道行は何れも實説に近かるべしとある。「反古籠」に、「近松は西の作者、海音は東の作者なれば、敵同志の如く立別れ、新淨瑠璃の趣向など一言半句を逃すべきにあらず。然るに西の宵庚申と心中ふたつ腹帯とを見れば、いづれも八百屋の女房は、善人なるを悪人、仁右衛門は悪人なるを後生願ひに振替へて書きたること、孔明と周瑜が手の内に伏といふ字を書きたるが如し、達田辨二云(安永頃の人、淨るり作者)海音勝利にて豊竹座大當りなりければ、芝居より千日(法善寺のこと)へ石碑を建て供養しければ、彼の八百屋にて大いに怒り、夜分石碑を芝居木戸前へ建てさせけるを、翌朝表方の者取退けんと言ひけるを、却つて景氣になるべき故、其儘に置くべしと、座本越前の指圖によつて取退けずして建置きける、此事どつと評判になり大入なりしと」ある。

其の後程なく、幕府では法令を發布して、文藝の作品に心中の類を題材とする事を禁じた。

「徳川法律類纂」享保八年の條に云はく、「男女申合候而相果候者之儀、自今者死骸取捨、一方存命ニ候ハバ下手人へ申付、尤死骸申候事停止可申付候、且又双方共存命ニ候ハバ、三日晒候上、非人手下ニ可申付事。一、惣而此類繪双紙并歌舞伎狂言等ニ作り候事、堅仕間敷候、若相背候ハバ急度可申付事。右之通被仰出候間、町中ニ可觸知モノ也。卯三月」。

これが爲、本曲を大阪の竹本座に再演した時(安永四年正月九日より)は、心中の語を削つて、「おちよ宵庚申」と改題した。そして其の後も屢々上演された。

歌舞伎では、「新板宵庚申」が、享保七年三月七日から、大阪中之芝居に上演された。これは「八百屋心中」(享保七年夏、京都)、「花毛氈」(内容が知れぬから何とも言へぬが、或はおちよ、半兵衛を仕組んだものか)、「二腹帯」(享保七年秋、江戸)、「心中宵庚申」(寶曆六年七月、江戸)、「道行垣根の結綿」(天明元年四月、江戸市村座に上演。おちよを瀬川菊などがある。戸中村座に上演)、「花毛氈」(天明元年四月、江戸市村座に上演。おちよを瀬川菊などがある。戸中村座に上演)の丞、半兵衛を坂東三津五郎が勤めて好評であつた)などがある。

「心中宵庚申」の道行の部分は、種々の題名に替へられて、他流の語り物ともなり(宮蘭鸚鵡石(宮蘭鸚鵡風軒直傳)の中にも、「おちよもない」)、また上田村の場は、最近まで屢々上演されてゐる。

上 卷 (郷左衛門内)

登場人物の主な者

淺 あさ 山 やま (遠州濱松城主) 坂部 さかべ 郷左衛門 ごうざゑもん (弓頭。六十歳)

岡 おか 軍右衛門 ぐんゑもん (郷左衛門の組下) 大橋 おほはし 逸 いっ 平 へい (郷左衛門の組下) 山脇 やまわき 小七郎 こしちろう (郷左衛門の小姓。半兵衛の異母弟。十七歳)

半 はん 兵 べい 衛 ゑ (濱松に生る。五歳の時大阪に出で、二十二歳で新穀油掛町) 小 こ 一 いち 兵 べい 衛 ゑ (郷左衛門の中間)

梗概

遠州濱松の城主淺山殿は、家中の者等に節儉を奨め、武藝を勵まれる。今日も弓頭坂部郷左衛門等の家來を伴つて鷹狩に出られた。其の歸途郷左衛門方に立寄られるといふので、郷左衛門の留守宅では、城主を款待する準備に多忙を極めてゐる。折から、かねて郷左衛門の小姓山脇小七郎の美貌に懸想してゐる組下の次男、金田甚藏・岡軍右衛門・大橋逸平が打揃つて見舞に來り、小七郎が出でて挨拶する。金田等「殿様が御成になつても、其方の執成では越度はあるまい。が然し我等に心を盡させて、つれないのが玉に瑕だ」とて、小七郎の袖を引いたり、掌を抓つたりして戀を挑む。

郷左衛門は岩水寺から主君に別れて早く歸り、小七郎の差出した料理獻立の品数が多いのを見て、「主君は質素を旨とされるのに、この膳立は誰が計らつたか」とて、大いに怒る。小七郎「これはお侍方の指圖ではありませぬ。私の兄大阪新穀油掛町八百屋半兵衛が、亡父の十七回忌墓參の爲、二三日前から當地に參り、お長屋に逗留してゐます。兄は料理法を心得てゐるを幸ひに、獻立を頼みましたのは全く私の不調法でござります」とて、平にあやまる。郷左衛門「他國者では主君の御志を存じまゐい」とて、怒が解けた。小七郎は折こそよければと、兄を呼んで郷左衛門にお目見えさせる。半兵衛は、自分が作つた獻立が御意に召さなかつた事を陳謝した。郷左衛門は、主君が家中の者等に節儉を奨められる例を引き、「この度も粗末な料理でお取致す事が却つて御意に召すのぢや」と語り、百姓から貰つた巨大な山の芋を出して、「これを手際よく料理せよ」と命じた。

暫くして城主は數多の家來を引連れて御出になる。郷左衛門は畏つて御迎申上げる。山脇小七郎・金田・大橋等も郷左衛門

の後に續いて出で、城主に御目見えする。半兵衛は料理場に居て、氣忙しう立働く。城主は股引がけで上段に著座される。やがて粗末な料理の御膳が運ばれる。城主は數獻を傾け、機嫌よく食事を終へられる。其の間に郷左衛門は料理場に来り、半兵衛を睨つけ、「今日の料理は山の芋のでつかいのを、御覽に入れるが御馳走だと思つたのに、寸断々々に切碎いたのは以ての外だ。堪忍ならぬ、さつさと出て行け」と怒る。半兵衛「これは心外の至りに存じます。總じて大名高家の御方々は大様であるから、珍らしい物を御目に懸けた時、澤山にあるものと思召され、隣國とのお出會にも、己が領内には大きな山の芋があるなどと、お國自慢のお話が出るかも知れませぬ。若しも其の時他國から所望されて、國中を尋ねても有合はせぬ折には、自然殿様を嘔吐きにしてしまひます。さうなつては相濟まぬと存じて、かやうに料理致したのでござります。御機嫌に違ひましたのは私の不運。如何様にも御存分に遊ばせ」と、きつぱり言ひ放つた。郷左衛門も、これは尤だと心附いて和らぐ。時しも城主が御歸城になるので、郷左衛門は御禮のお供をして出た。

半兵衛は料理の役を無難に済し、煙草を吹かしながら休息してゐると、金田・岡・大橋の三人が寄集り、互に小七郎と慇懃を通じようとして、半兵衛に斡旋を迫つた。その時小七郎は自分に送られた數多の艱書を出した、其の中には中間の小一兵衛が書いた文もある。半兵衛は弟と既に申合はせてゐたので、弟に目くばせすれば、弟はやがて部屋に入り、白小袖に淺黃社袴を著して出る。半兵衛は肴臺に抜刀二振を載せて弟の前に置き、「小一兵衛は爰に居ないが、其方等四人に惚れられては、何方へ進ぜても残る三人のお恨みとなりませう。眞實御執心あつて、未來までも小七郎を不便と思召す方は、この場で弟と刺違へ、人の構はぬ未來での念者若衆になられたがよい。さあ何人でも兄弟の契約々々」と睨附ければ、三人共に後込みする。

この時、小一兵衛が門脇から駈出で、「未來で僕をお念者にして下され」とて、白刃を取つて立寄れば、小七郎も引寄せて刺違へようとする。半兵衛「やれ待て」と聲を掛けて、兩人の中に飛入り、「男氣見えた。小七郎に誠の惚人は其方一人ぢや。争ふ者があつてこそ大事の弟を殺さねばならぬが、争ひ手がないからは、小一兵衛と弟との家道を取つた」と言へば、小一兵衛小

躍をどして喜び、小七郎にしなだれ寄る。岡・金田・大橋は嫉妬しつとの焰はを燃もして、小一兵衛に搦なみ附く。小一兵衛は力に任せて彼等を投なげばせば、三人は痛みを押へて逃げ去つた。半兵衛は之を見て小氣味こきみよく、「扱も小一兵衛お手際てぎはお手際てぎは。我は他國者なれば、便たよりない弟が事を頼む。今日けふの料理の御褒美に、二人が事を且那へ申上げ、世間晴れて懇げんろさする」とて、二人の仲を取持つた。

評

質素を旨とする遠州濱松はままつの武家の情況を述べ、そして又身分の卑ひ若侍の間に起る、衆道しゅだうのいきさつを示した。この巻と紀海昔作の「心中二つ腹帯」との構想こうさうを比較すれば、其の行方ゆかたに於ては全く違ふが、共に城主の徳をたたへた事や、互に刺違さしちがへようとする芝居を工たくんで、無事に結末を附けた事に於て、類似點を認められる。これは近松が紀海音の著想を學んだからである。

上卷

○江戸へ六十里 「國花萬葉記」卷之八、遠江國の條に「瀨松御城主 江戸より六十五里六丁」
○梅の難波 「古今集」序の歌に「難波津に咲くやこの花冬ふゆもり、今は春はるべと咲くやこの花」とあるに據る。この歌は謡曲「難波」にも見え、「この花」は梅花である。

○淺山殿 享保六年、瀨松城主は松平伯耆守資俊である。資俊は元禄十五年から瀨松城主となり、享保八年に至つて松平騷後守資訓これに代る。

○在國 江戸参勤中でなくて、本國に居るこゝ。

○日ませ 隔日。

○上一人 帝王。國君。こゝは瀨松城主をさす。

○犬も油断はならざりし 鷹狩には犬を連れてるから、かくいふ。後文に「鷹匠犬引刺足懸」とある。

花のお江戸へ六十里梅の難波へ六十里、百二十里の間の宿都しゆく離れて遠江、濱松の一城、主淺山殿の御在國、町屋の賑にぎわひ商あきなひに撓たゆみなく、武士は弓馬きうばに怠おこたらず日ませ※のお鷹狩たかがり、上一人の勵はげみより犬も油断ゆだんはならざりし、お家相傳さうでんの弓頭ゆみかど坂部郷左衛門、六十の黻つむぎの夜晝よひるなく、お側去そばさらずの野出頭のしゆしちげ今日も鷹野たかのののお供ともにて、

○弓頭 弓を射る歩卒の長。
○野出頭 主君が郊野に出られる時、いつも側に附隨ふ氣に

入りの臣。
○鷹野 鷹狩。

- 大手の見附 大手門(城の正門)の前。
- 給人 扶持米を給される平侍。
- 若黨 年若い郎黨。武家の家臣。
- 降つて涌いたる 天より降り、地より涌いたやうな意外なるをいふ。
- お成座敷 城主の御來臨になる座敷。「お成」は、高貴の人の遷らせられることの意味。
- 盃子 正式の茶の湯に用ひる四本柱の櫛で、風爐・茶桶・茶人・水さし等を載せるもの。
- 草引 草取り。ごつさくさにいひかく。
- 薄茶 茶の氣の稍烈しいものを、分量少なくして茶に立てて飲む挽茶。
- 茶道は挽木：箒に揉まるる 謡曲「放下僧」に「茶臼は挽木に揉まるる、ゆに就忘れたりよ、こきりこは放下にもまるる」とあるの作り替。
- 板元 板場ともいひ、料理場。
- 淵 淵藪。容集まる所。
- おちた肴 死んだ魚。
- 三枚におろす 兩個の肉と香骨の部分との三枚に切る。
- 南京の皿 支那の南京焼の皿は貴重なものである。
- 家具 食器をさす。
- 組下 組頭の配下。弓組の頭等左衛門の部下である。
- 二番生え 次男。

留主の屋敷は大手の見附お鷹歸りの御入とて、晝當場より先案内給人若黨お出入の町人迄、降て涌いたる忙がしきお成座敷の替疊、床に掛物臺子の埃掃いつ拭ふつ、お庭の掃除どつさ草引薄茶挽、茶道は挽木に揉まるる、實誠忘れたりとよ、門の盛砂小者は箒に揉まるる、臺所の板元には青物の淵魚鳥の山、獻立は三汁九菜おちた肴を吟味の役人、こりや芽出度いを三枚におろし山藁は八百屋が請取、南京の皿蒔繪の家具善盡くしたる響應也、組下の二番生へ金田甚藏・岡軍右衛門・大橋逸平、打揃ふたる血氣盛り立掛のんこの頭がち、裾はお留守の勝手見廻、いづれも御苦勞、今日お鷹野より直ぐお腰掛けらるゝとな、急なお成でさぞ取込、お料理組もう出来たか早し、我々も幸非番、用あらば遠慮無用」と挨拶口々、座敷口より小姓山脇小七郎、生花屑を花盆に、花の露浮く前髪盛りするすと立出、是は、日比の御懇意、お揃ひなされての御出、主人郷左衛門さぞ満足、只今の殿様前代と違ひ、何角に附て輕いお身持、壁に馬乗かけし今日のお成、主人はお供我々が當惑掃除等もそこ、書院の筆架飾り石、生花も手づ、ながら間に合するも奉公、御内見の上御直し下され」と詞も風も出過ぎる、若衆と糠

○立掛のんこ 立掛鬘ののんこ結をいふ。立掛とは、髷の根を高く立てたもの。「のんこ」とは、兩鬘を細く狭く残し、髷を高くする結髪をいひ、伊達を好む若者の間に流行した。◎「のんこらしを見よ。」

○頭がち 容體ぶるこ。生意氣。「俵言集」に「あたなが此はさしてもなき人の、初対面より假敵にいかつがましきを云、又うはづりなるを云。」

○裾はお留守の勝手見廻り 裾は、頭の立派なこは違つて、注意が行届かずして粗末なるを、お留守にいひかく。そして留守見廻りに来て勝手元をのぞく意。近松作「鏡の權三重帷子」上巻に「裾はお留守を念がけて。」

○小姓 黄人の側に給仕し、煙草盆・お茶・お手水など兼て膝許の用を辨じるもので、年配十三四歳の者がこの役に多い。

○花の露浮く 花が水氣を帯び、生々として色艶の美麗なるをいふ。以て血氣盛りの美艷なるに喩ふ。

○前髪盛り 前髪を立てて結髪した若衆がかり。

○壁に馬乗りかけし 俄かな事にでくはして、當惑した喩にいふ語。唐荆川錫の文に「其難如願策」篇連「壁面」。

○書院の筆架 書齋造の塵敷にある筆かけ。

○手づつ 不調法。拙いこと。「権調架」にて「つゝ」手筒の如くはたらかぬ意也。

○若衆と極まりし 武家の塵敷に勤める若衆は禮儀作法が正しい。また武士は粗食に甘んじ、殊に舎人・奴の輩は、常食に麥飯や糠味噌汁を啜つて

味噌の味は屋敷に極りし、金田甚藏・岡・大橋「何か、君のお手際御事が有ふか、さりながら人に心を盡させ無下ない心が一ツの疵」と、目面も明ぬ取込に額で

睨みつ袖引つ、手の中つまむも一昔古ひ仕掛が田舎也、坂部郷左衛門衣服の綺羅

も世に連れて、戒むるとはなけれども、上に従ふ木綿羽織に紺股引、鷹野出立の凜

凜しげにすたくと立歸り「家來ども掃除は出来たか、ヤアいづれもお見舞過分、

いやさ、年は寄るまい物、岩松村岩水寺の門前よりお暇請、たつた一飛と思へ

ども氣情も足も心ばかり、さりながら殿には今一拳あそばしお入有ぞ、急く事は

生活したのであるから、味噌の調理法も上手であつた。よつて

○人に心を盡させ 美少年小七郎に心を盡し戀慕しても、小七郎が嫌かぬから、かくいふ。

○無下ない いちづな。いちがいな。情ない。「ない」は意を強める接尾語。近松作「重井筒」中巻に「むけなう、せくでは無ければ、も、それにさへなは厭引あり。」

○目面も明かぬ取込 人の目面もわからぬ程の目もくらむ混雑。

○額で睨み 上目を使って人を睨み。いろ目を使って心あるを示し。語に額で人を見ることいふ。

○手の中つまむ 拳を抓つて、懇懇せるを示す。

○古い仕掛が田舎なり さやうな戀の仕掛は、既に古式になつたが、その古式をやるのだから、さすがに田舎たこの恐

○すたく 呼吸早く、急ぐさま。近松作「養生兩田川」に「すたく坊主、すたく、言うてぞ加持しける。」

○過分 身に餘つて忝いこと。

○岩水寺 靜岡縣愛宕郡赤佐村根堅にある眞言宗の寺院。境内眺望絶佳で、根堅の鐘泉がある。「國花萬葉記」卷之八、遠江國中諸宗佛閣の條に、「岩水寺 眞言 岩松村 寺領四十二石。」

○氣情 氣まきやうじであらう。ここの文は、しつかりした氣分も足も共に弱り、心ばかり急ぐ意。

○一拳 一回腕を飛ばして鳥をさらすこと。鷹匠の拳から鷹を放つ故に拳といふ。

○あらない あらず。いらぬ。

○身上を板元で切りはたく 身代を料理で漬す。「板元」は料理場をいふ。「はたく」とは打碎く意。「盛調菜」に「はたく」身をはたくとも白にて物をはたくともいふ。

○機嫌 正しくは謙謙で、謙をしり謙ふこと。轉じて内心の思はく、心もち、心持の愉快なことの意といふ。

○光り 怒つたので顔が赤く光るに、叱りをいひかく。

○鞆油掛町 大阪市西區城下通二丁目あたり。「國花萬葉記卷五之三」に「油掛町」京町堀より四筋目、西橋堀掛町物より西へ、安土町橋筋海部堀にて行當る、鹽屋千後千福川屋中買商人町」。

○召使はるる 申しし。小七郎が召使はれてゐる主母坂部那左衛門に、兄半兵衛から禮も申したい。

○料理利 料理法にすぐれてゐること。

○三十餘年 半兵衛は、五歳で八百屋の養子となり、「こゝ」三十餘年町人であるから、其の年齢は三十五歳を超えてゐる。紀海音作「心中二つ腹帯」には、「生年既に三十八とある。

○藏屋敷 徳川時代に、藩主や大なる寺社などでは、其の領内の特産物や米穀を、大阪に運送して貯蔵し、これを賣捌く爲に、家臣を派して其の出納を管せしめた。其の屋敷を藏屋敷と稱した。

○留主居 藏屋敷に置いた投で、藏屋敷に己が

※あらない、先お獻立を「一見」と長々と書附たる、半ば讀さし大きに魂消「こりや何じや、殿の御膳は一汁三菜と先達て言ひ越す所、三汁九菜の魚鳥盡し、身が身上を板元で切はたくか、此獻立は誰が指圖」と、以の外の不機嫌に頭も光りちらかせり、小七郎しとやかに、「憚ながら此儀はお侍中の指圖ならず、二三日以前より、お長屋に逗留致し罷在大坂の住人、鞆油掛町八百屋半兵衛と申て、元は御當地遠州生れ私とは腹がはりの兄、様子有て五歳の時大坂へ立越へ、町人に奉公し商人の養子と成、今の親は八百屋伊右衛門、實父山脇三左衛門は私が生れし年相果、當年十七年親の墓へ年忌参り、私事も懐かしく、召使はる、御主人へ御禮も申たしと、逗留致せし兄半兵衛、商賣は八百屋殊更料理利、幸と今日のお獻立を致させし不調法は私、お目出度き折から御機嫌を直され、兄へも御逢ひ下されかし」と恐れ入たる謝罪に、主人の顔も打解ければ、「是半兵衛殿能折のお目見へ、お獻立も仕直すため早う」と呼立る、聲を力に兄半兵衛魂は武士なれど、三十餘年町人に業も姿も染み附し、料理袴を假初めに御前といへば氣もおくれ、臺所の板敷蹴躓くやら滑るやら、はふ〜這出手をつかへ、お國の御家風も

藩ミの間の務めや、薩屋敷の出納を管した。
○朝鮮人の饗應御堂 朝鮮人が來朝して、享保四年九月四日大阪に着いた時、御堂(大阪市東區北久太郎町四丁目薩波別院)を旅館に於て待成もて立した。「攝陽奇觀」卷之二十五ノ上、享保四年の條に「九月朝鮮人來朝」。

○七五三・五五三 七五三も五五三も膳立の方式。五五三は七五三の略式である。いづれも飲食物の膳数をいうたもの。委しくは「近松譜載」に記して置いた。索引によつて「七五三」を見よ。

○山陰中納言 中納言藤原山陰をいひ、光孝天皇時の人、四條流料理の方式の祖。「大日本史」列傳に「藤原山陰：仁和二年叙從三位、任山納言、兼民部卿、三世傳山陰能割、魚鳥一時稱得、應子術」。

○きりく てきほき。はやく。切りくをいひかく。

○鹽梅 味のかゆん。ぐあひ。やらす。「増補俳諧集覽」に「あんはい」接排の音にて五味を調するをいふ、後世鹽梅の字を用ふるは附會なり。又あんはいは接排の音より出て味ひをいひ、轉じて物のをりあひ様子のこじにへり。

○濱竹の子 鹽漬の筍。

○廟參 賽参り。
○高師山 三河國瀨美郡と遠江國濱名郡に跨る丘陵。「國花萬葉記」卷之八、遠州國中名所之郡に「高師山」二川の宿と白須賀の間也、北は山、南は海なり。

存せず、お獻立を致せしは不調法、先達てお使に一汁三菜との御意なれども、大坂藏屋敷留主居方の振舞でも、随分軽いが二汁五菜、結構には段々、朝鮮人の饗應御堂へも雇われ、七五三・五々三、山陰中納言の家の切方、料理一通りは承り傳へし故、申てもお大名の膳部、よもや一汁三菜とはお使の聞誤りと、いはれぬ念を入れ過しは猶不調法、お好みの一汁三菜、我が手際できりくしやんと切立焚立、鹽梅よしの御機嫌よき、御意を松茸・濱竹の子生に變らぬ仕様が秘密と、口も料理の鹽梅加減、郷左衛門打笑ひ、ム、山脇三左衛門が忤なれば身が爲にも家來筋、親の廟參奇特く、幼少より他國に育ち、當御代の御風儀知らぬは理り、料理は勿論、衣類諸道具總て無益の費お嫌ひ、上方でも風聞はないか、去年十月高師山のお狩場、身が相役佐野文太左、始ての御供に縮緬の羽織著召れたを、殿がじろくと御覽なされ、縮緬は風にしぶき面倒な、重て措ける是をくれると御意なされ、お手づから下された召替の木綿羽織、さしもの文太左はつと赤面、其後此事を工夫すれば、お供に參る文太左、縮緬の羽織著召されふ様がおおりない、

○しぶく 風吹く義。風に吹かれてびらびらする意。しは「しまき」風卷などのしと同じく風をいふ。

○工夫 愚案、樓調架に「くふう」伊藤氏の説に「工夫手間

の事也、近世平生の口語に、事を愚案する事を工夫といふ云々。○おおりない おおりにない(御有無)の略。ありませぬ。ござらぬ。この語は能狂言などの中にも見えてゐる。

○家中 大小名の家人。藩中の侍。

○木挽丁。堺丁 東京市京橋區木挽町、及び日本橋區堺町(今は船場)は江戸に於ける劇場の所在地で、芝居座が多かつた。

○釣 釣銭。「役者から釣を取る」とは、芝居役者よりも過ぎてゐる意で、物を買つて拂ふべき金の過剰なるに喩へる諷。

○衣紋附 衣裳の著振り。「衣紋」とは、衣服着用の方式の義。近松作「博多小女郎波流し」上之巻に「顔を見合す荒男根に嗜む衣紋附、鬼が花見る風情なり」。

○齋藤：著たれども、齋藤別當實盛は平家に屬し、錦の鎧直垂を著て、加賀國篠原の合戦に討死した。講曲「實盛」にも「實盛郡を出でし時、宗盛公に申すやう、故郷へは錦を著て歸るまいへる本文あり、此度北國にまかり下りて候はゞ、定めて討死仕るべし、老後の思出これにすぎじ、御免あれと望みしかば、赤地の錦の直垂を下し賜はりぬ」。

○錦の直垂 大將が鎧の下に著る錦の直垂。
○佐々木源三 佐々木源三秀義は保元の亂に源義朝に従つて白河戰を攻め、平治の亂に源義平に屬して平重盛の軍に戦つた。義朝の死後は郷に歸り、平家に屬するを肯じなかつた爲に、所領を奪はれて辛苦を嘗めた。源頼朝兵を擧げるや之に應じ、善永三年平家の臣平田家繼と近江國大原莊に戦つて死んだ。行年七十三。

○肩を裾に結び 肩の弊れて下つてゐる布がびら／＼するから、それを裾に結び附け。

かねて文太左にお示し合せ、諸家中の見る前木綿羽織を下されしは、美麗御停止とはなく、自づから奢りを止むる一家中への御意見、それを察せぬ御家中の二番生へ達のござまを見よ、木挽丁堺丁の役者から釣を取る衣紋附、己が身の分際も知らず、一概に殿がお吝い／＼と物體ない陰言、綾錦を召れてもお大名、綿布を召れてもお大名、齋藤別當實盛が最期に、錦の直垂は著たれども、源氏を捨平家へ返り忠の武士、心は汚れし襦袢同然、又佐々木源三は二君にも仕へず襦袢の肩を裾に結び、頼朝の御代を待しは心の錦、今の武士の美麗を好むは實盛、佐々木が遺風を芳しと思召す此殿の御行跡は、下を寛ろげ世を裕かに、賣買を安くせん爲の御儉約、武士は素より町人の其方人ら迄此恩を忘るゝな、朝夕の御膳部も一汁三菜、酒も數を定られ三杯限り、今日のおもうしも庵相程御意に入、獻立も書に及ず、コリヤ飯は赤交りの古臭いをすつくりと焚かせ、掻立汁に小菜の浮かし、向ふ附はおろし大根鰯膾、焼物は室の酢煎それも二つ切、引て古茄子の香の物、扱平には、それよ、家來に持せし山の芋是へ／＼と呼出せば、五尺ばかりの山の芋中間二人が指荷ひ、料理場の板敷へ菰を放して昇上ぐれば、半兵衛横手を

○行跡 行状。みもち。

○一汁三菜 この膳立は、手前の向つて右方に汗、左方に飯を附け、向う側の右方に膳、左方にひらぎらを附け、中央にかうのものを附けるのである。

○おもしろし おもよほし(御儀)の約。御駕應。「大矢敷」二に、「御もしろしの朝の春も近づきて、初番の鳥やこかねつり替」。

○赤 大唐米即ちあかごめをいふ。この米は赤斑があつて、粘り氣少く、品質粗悪である。

○すつくり 水を少くして硬く炊ぐをいふ。近松作「大磯冠第四に「雪の白揚すつくり、さ、菓子班に黒豆散らし」。岡山縣下では、飯を硬くたくを「飯をしつくりと焚く」などいふ。「しつくり」もすつくりと同じ意である。

○飯立汁 おとし味噌(味噌を濃らす濃さぬもの)の汁。

○向う附 汗の向う側に附けるもの。「一汁三菜」の條を見よ。

○おろし大根 大根おろしにかけて搾りくづした大根。

○室 室鑿(むろあがら)。「和漢三才圖會」に「室鑿 多出于播州室鑿、故多之、形似鑿而略圓、有白刺眼大、各月作齋、東海亦多出、味脆不佳爲下品。室は播磨國程保郡にある海産。焼物は膳とは別に盆に載せて出す。

○引いて 其の次に。
○平 平梅。

打「扱も圖なし、御當地は芋所か一生の見初、大坂で見世物に致したら、錢金の擲

み取、第一お家の吉相何故と申に、今日は殿のお成旦那の御出世追附、山の芋か

ら鰻にお成なされふ」と、輕薄ぬらくら口に鰻の油とろりと乗せかくれば、さ

ば「今日の仕合せ、手下の百姓殿のお成を聞附、身が歸るさの道料理にせよと

て呉れしは幸、今日の御馳走これ一種、お身が自慢の庖丁隨分切方を出來してく

れ、頼む」と詞の下お成門の貫の木の音、すは殿の御入」とひしめけば、郷左

衛門も次の間に袴改めお迎とて出ければ、山脇小七・岡・大橋・金田も續いて急ぎ

行く、半兵衛料理に心は急ぐ打つたり舞ふたり身は一ツ、薄刃押取五尺の大芋三寸

ばかり切調へ、つゝ皮剥いてちよき、葛醬油の出し鹽梅煮方は急ぐ殿の

お顔も拜みたし座敷口より差覗けば、御城主も股引がけ上段に著給ふ、一間隔て

○圖なし 方圓(ほうづ)なし。法外な極めて大なるをいふ。

○掴み取り 勢せずして大儲けする意にいふ。近松作「女殺油地獄上巻に「芋の御手の掴み取り」。

○山の芋から鰻になる 語。「傳言集」に「續狂言記成上りものした山の芋が鰻になるも一定でござる」。

○ぬらくら 鰻の縁語。
○とろり 油の縁語。
○切方 切りやう。料理法。
○打つたり舞うたり 一人で鼓などをつつたり、或は舞うたりする義。以て、一人で種々な事をするに喩ふ。
○葛醬油 醬油を蒸立てた中に、葛粉を溶いたのを交せて、更に蒸立てた汁。
○出し鹽梅 煮出し汁の味加減。

○せこ 獵の時、鳥獸を驅出す夫卒。(見索引)
 ○目八分 膳を捧げ持つに、食物に自分の息が
 かからぬやうに、目から膳の八分通り見える所まで
 持上げるこゝ。

○引重箱 糞膳に添へる食物を入れた重箱。

○かだめ 加太布。紀伊國海草郡加太の名産、
 裙帶菜(わかめ)の稱。現今も加太町の名物として賣
 る。

○臺引物 魚類菓子などを臺に載せ、膳部に添
 へて出すもの。こゝでは加太布を引物に出した。

○殺蜺 殺附きの蜺。

○ちやうど 杯に酒を添れる程盛るさま。たつ
 ぶり。近松作「生玉心中」に「ちやうど飲み、瓢箪
 傾け注ぎかくる」。同作「鎌田兵衛名所益」に「鎌田も
 こすこすちやうど受け、ついと干し」。

○立はたかり 立ひろがり。「倭調茶」に「大手
 をはたけなご云へるは閉く藝なり」。

○でつかい 物の大なるをいふ。「でき(出来)
 が延びてでかい」となり、更に促音が添加した語。

○言語道斷 言語に述べる道の斷えた義。自分
 に悟るより外、道なきをいふ。轉じて、沙汰の限り
 の意に用ひる。

○一分自慢 自分は面目を施したと誇るこゝ。

○高家 徳川時代に高家といふは、名族の子孫で
 徳川氏の旗本とされる家。祿は萬石以下なれども、
 四位中少將になり、朝廷と幕府との間の儀式、伊勢
 神宮、日光東照宮の代理などを掌つた。

て近習の人々鷹匠・犬引。列卒。足輕。玄關の小庭に居餘り、臺所口を押通り長
 屋長屋を休息場、奥には料理の勝手を急ぎ、主郷左衛門殿の御膳目八分に持出れ
 ば、思ひくりに給仕の作法、お汁が替はる替へ食繼、初獻の肴は鮓の足一切れ當
 の引重箱、二獻めも御機嫌よくお杯が替はつて平の蓋、有がたかだめの臺引物、
 定の通御酒三獻吸物は殺蜺、思ひの外の無馳走に上には御悅喜納めの杯、坂部も
 てうど下されて首尾よく、御膳は取れにけり、郷左衛門板元に立はたかり半兵衛
 を脱附、今日の料理は芋一種、でつかい所をお目に懸くるが御馳走、どの様に切れ
 ばとて五尺餘りの大芋、一寸足らずに切碎く言語道斷、手打にする奴なれ其他國
 者といひお成の時節、屋敷に叶はぬ出てうせせい」と、息詰つたる腹立は詞少な
 に寢まじし、半兵衛膝も動かさず、「是は旦那の御意共覺えず、今日のお料理随分
 切方に氣を附、心一杯出来せしと一分自慢、御褒美はなされいで存の外の御叱り、
 總じて貴人大人へは、何に限らず斯やうの珍しき物お目にかけてぬが料理の習ひ、
 大名高家は大様に、一度お目に觸れられては澤山に有物と思召、隣國のお出會
 にも、身が領内には珍しき山の芋有などと、お國自慢のお咄の上、ふと餘國より

○してのける してしまふ。

○詞の引放し てきはきと言ひ切る。

○残る所 心に残る所。

○山の芋で足突く 思ひ懸けぬ、ひよつとした事や失策するに喩へていふ語。「俳言集覽」に「山の芋で足をく」長手で足をくとも云。

○振出す毛鏢 行列の時、鳥の羽毛を櫛に附けた鏢を振りつつ、足並そろへて拍子取り、威勢よく行くこと。

○臺笠 袋に入れ、棒を附けた被り笠をいひ、行列の時に持つ。

○立傘 天窓被又は羅紗の袋に入れた長柄の傘をいひ、行列の時に持つ。

○大鳥毛 鷹の羽毛を栗のいがのやうに大きく作つて、鏢の櫛に附けたものをいひ、行列の時に持つ。

○引馬 鞍轡をかけ備り立てて、行列に交り引き行く馬。

○きせり きせる。

○鐵拐が鐵を延ばす 鐵拐は支那の仙人で、姓を李といひ、道術を得、氣を吐いて己が姿を虚空に現出する術を行つたといふ。「書言字考節用集」に「鐵拐」(列仙傳)今世在々所圖、吐氣轉象前則是矣。以て半兵衛が嘆息して「真ひとくつろ」ました意にいう。

○神ぞ 自誓の詞。「神を照覽ある」の略、即ち偶れば、神が見そなはし給ふから、直ちに神罰を蒙る法もあれとの意。

御所望の時跡へも先へも行かず、國中を尋ねても有合せず、おのづから殿様を嘔吐

きにしてのける、其處を存て常の如くの調味は、且那へ御奉公と存せしに、御機

嫌に違ひしは身の不仕合、如何やう共御存分に遊ばせ」と、どこやら詞の引放し

残る所が武士氣質、郷左衛門口あんどり「ム、こりや尤、イヤ尤、あやまり申

た、そちが言分眞直に、御前へ申がまた御馳走、やれ、山

で足突た」と、どつと笑へば、「早お立」とお供廻りが振出す毛鏢、臺笠立傘大鳥

毛、乗物引馬嘶き立御城内迄お禮の御供、郷左衛門もお輿に添ひ、暮れぬ間の御

歸城と氣も夕陽の 入日影、座敷の仕舞は、侍方庭のしまりは中間小者、役め

に立別る、臺所には半兵衛一人庖丁・眞魚箸・薄刃・組板取り片附、煙管くは

へて吹息に、鐵拐が鐵を延ばしけり、二番生へ共はらくと立寄、拙者らは郷左

衛門組下の弓役共、お身は山脇小七郎の舎兄とな、早速の無心、弟の事を頼むも

馬鹿らしけれど、前髪姿に神ぞ爪先よりきり、迄打込、毎日、静心なき玉

章、奉書の代も五百目ばかり、身上を紙に打込んでもつれない小七郎、兄貴、是

○ざり、頭部の煙毛。

○静心なし そはく、と氣せばしい。

○奉書「雍州府志」土産門下に「本朝高貴之侍臣、奉主人之命

命而告之於下、謂奉書、其紙用堅硬而細白者、是謂奉書紙、今略紙字而高之、加州産爲堪用。

○身上 身代。

○ねまる すわる(坐)。現今も石川縣羽咋郡地方などは、「すわる」を「ねまる」といふ。

○手繰りかかる ひつたくる様に言ひかける。

○外郎つんだ 外郎を撮(つま)み囃(は)んで、其の芳香によつて日中の悪臭を消す、これは對話する時の身だしなみである。外郎は硬い小粒の丸薬で、苦味があつて香氣高く、效能も今の清心丹や仁丹の類である。この丸薬は相州小田原の名物である。○小田原外郎とを見よ。

○弓矢八幡 武士が自誓の詞。

○悪風 忘ずるばかりなり 謡曲「船辨慶」に「悪風を吹きかけ、眼もくらみ、心も亂れて、前後を忘するばかりなり」とあるを引用し、口中の悪臭を吹き掛けられるので、堪へられぬ意にいうた。

○衆道 若衆道。男色の道。

○政道 禁制。

○もやつく 紛擾の義。ごたく。近松作「淀姫出世傳」に「吾妻が客を斬つたど町のもやつき」。

○振袖 長袖衣をいひ、昔は男も元服以前に着たもの。小七郎は小姓であるから、振袖を着てゐたのである。

○無下に いちづに。無情に。

○立て分 面目を立てた教し方。

○男色 若衆の意氣地。

○意氣方 心いき。心立てのまづはりしてゐること。近松作「女殺油地獄」上巻に「武家の意氣方、泥まぬ御馬、足を早めて急がる、」。

非所望申た是、軍右衛門がねまり申て手をつかへるこりやさ、拜み申すくれ申せ」

と手繰りかゝれば甚藏・逸平「コリヤ半兵衛、おゝと言つたらむつかしいぞ、外

方にも惚人が有、奉書は愚かな事、君にかゝつて一貫五百が外郎つんだ此甚藏、

弓矢八幡身にくれろ」「イヤサ此逸平にくれろふ」と、耳際に咬み附如く悪風吹

かけ眼もくらみ、前後忘するばかり也、煙管も放さず半兵衛大胡坐、御城下の習

ひ衆道御法度、おゝと言へば弟が首が御座らぬはいの、」「イヤサ當國は女のみだ

らは下々迄御政道、衆道にはお構ひなし、三人の内どれなりと、魂据へて返

事せろ」ともやつく後に、小七郎是迄請し文一抱へ半兵衛が前に置、兄者人の手

前も恥しながら、斯う成上は隠されず、數ならぬ私に御執心とは振袖の身の思ひ

出、忝いは山々なれど、獨ならず彼方此方の文の數、無下に返すも情知らずと

請取ては置ながら、一通も封を切らぬが何れも様への立分、何方に隨ふ心もなし、

兄半兵衛の存られし事でなし、此文封のまゝに御返辨、思し切て下され」と、男

色立て抜く詞の優しさ、「其意氣方に猶泥む」としみましたるふ取廻せば、半兵衛

見かね「ハテサテ聞分もない方々、形こそ町人心は侍、拙者が目利で惚人の内へ

○しみしたたるう しみかゝり、しつこく。
「したたるい」は、あつさりせぬ意。近松作「骨根崎
心中」に「生辨油の袖したる、さ戀の奴に遊ばせて」。

○慮外 無禮、不将。

○念者 男色の足か。

○白小袖に淺黄社袴 死装束である。「白小
袖無紋の社袴」など、書いたのもある。

○不便 便たよりのない義、轉じて、いさほしい
こと。かはいさう。(見索引)

○念者若衆 男色の兄弟分。

○拔身の杯 兄弟分の契約するに、杯に酒を
酌み交はさずして、拔刀を持つてすること。

○身せせり 身をいぢつて、もぢ／＼すること。
「日本水代藏」巻五に「佛の道にかしく、身をせせる
盃を殺ます」。

○道具屋 道具屋筋で語る。これは大阪の人道
具屋吉左衛門の始めた、男らしい調子で語る淨瑠璃
筋の一派。

○紺のだいなし 紺無地をいひ、中間小者の
服色。「坊屋離離」に「紺は申しき色にして、昔より奴
僕なご多く紺の無地を著す、俗に紺のだいなしとい
ふ是なり」。

やりませうコリヤ、小七郎、装束せい」と心を目にて知らすれば、「あつ」と心得
願きて部屋に、入れば半兵衛多くの文の上書讀、「ハ、ア皆各の名がき、此一括
りの上書に、小一兵衛とは誰事御存ないか」と問ければ、三人共口を揃へ、「其小
一めは此屋敷の中間、へ、エ慮外な下種めがやりおつたは」とるせ笑ふ、「イヤそ
うでござらぬ、此道に高下はない、其小一兵衛も呼出し並べて置いて念者に頼む、
「イヤ、下種め、身などと同座に置奴でない、殊に留主やら頼も見ず無用、」
といふ所へ、山脇小七郎白小袖に淺黄社袴、覺悟極て座につけば、半兵衛は取敢
へず肴臺の三方に、拔身二振弟の前に置、「惚手は四人惚れられ手は第一人、何
方へ進せても残る三人の恨、此兄は他國住居行末も氣遣ひ、否と言はさぬ御所望、
歴々のお侍町人風情に手を下げてのお頼退引ならず、弟に覺悟させての死装束、
上べばかりの戀慕でなく、未來迄も小七郎不便と思召すならば此場にて刺違へ、
人の構はぬ未來での念者若衆、サア弟を遣る、何方成共兄弟の契約々々」と三人
を睨附る、思ひがけなき拔身の杯、死装束に吃驚して「へ、ん、」と咳に紛
らし身せせりし、ぐつと言ひ手もなかりけり、御門脇の長屋より紺のだいなし、

○七の圖 肋骨七枚目。衣服の緒を肋骨七枚目の所まで引からけたのである。圖は鬨をいひ、鬨體を鬨體といふ圖も同じ。蓋し「づ」(鬨)は「ぢう」(鬨)の訛であらう。

○一振：振出す 昔の大名行列には、中間小者は其先頭を承り、大手を振つて、警戒の傍ら、威勢を示した。小一兵衛が飛出る風體に、行列の時のやうに、大手を振る當體によつて、かくいふ。

○かつつくばひ つくはひ(縛)を強めていふ。○シヤ 元氣を出す時に發する感動詞。

○二合半 奴は二合半の切米(見索引)に、糠味噌汁をすすつて生活するから、かくいふ。

○おだい 御懸繫(勝)の略。轉じて、飯。大藏流狂言(岡大夫)に「白飯(はん)は白いおだい」の事。

○てきないこんで せつない事で。じゆつない事で。「物類稱呼」五に「勞して苦しむことをせつない」と云ひ、又じゆつないと云ふを、加賀にてテキナイといふ。現今も岐阜縣吉城郡柳川村地方では、「苦しむ」と云ふ意にてきないといふ。

○つん出す 出すを強めていふ奴詞。

○やつかれ 自稱の代名詞。「櫻洲茶」に「奴こそあはれの義、こゝ反か也」。

○唐辛 奴や蟹籠昇などの輩は、酒の香に唐辛を食ふから、かくいふ。「近江源氏兼陣館 第五、四斗兵衛が蟹籠となつて、酒を飲む條に「唐辛」の紅葉をお香で、一口食うて々々と乾し」。

○かぶる 「櫻洲茶」に「俗に齒を入れて喰(く)ふことをかぶるといふ」。

裾七の鬨迄引からげ一振、振つて振出すは、戀に来ひとや小一兵衛三人の鼻の先、尻突出してかつつくばひ、兄御半兵衛様のお手前も、シヤお恥しいべいながら、小七様にとんと打込二合半の盛切おだい、喉に詰つてぎつち、てきないこんでごはりまする、今日君がお情をつん出して、未來ではやつかれめを、お念者になさるべいと、有難いやら、悲しいやら、セ、く、く、く、唐辛五つ六つかぶつても、こんな熱い涙は、出ませぬでごはりまするで、ごわりまする」と白刃を取て立寄れば、小七郎も引寄せてすはやと見へし刀の中、半兵衛飛入「コリヤ、狂氣したか小一兵衛」と二人を左右へ引分くる、「コレサ上方のお旦那、糠味噌汁の御恩に代へたお若衆、爰で死なねば心中が見へませぬ、是非に死なせて下され」と立上るを引伏せ、「男氣見えた、小七郎に誠の惚手は其方一人、争ふ者が有てこそ大事の弟を殺ふづれ、争ひ手のない若衆山脇半兵衛が挨拶、向後兄分に頼んだぞ」「ハ、はつ」と悦び小一兵衛、「お侍方と同座のならぬ奴めが、武士に劣らぬ魂ゆへ、結構なお若衆様の兄様とは辱しい、冥加ない、手附にちよつとはてくろしい事御免、半兵衛様も氣をお通し」とべつたり抱き附紺のたいなし

中之卷 (嶋田平右衛門内)

登場人物の主な者

嶋田平右衛門(上田村の百姓。六) お(十歳位。お千世の父) 輕(平右衛門の長女。お千世の姉) お千世(八百屋半兵衛の妻。平右衛門の次女。二十七歳)

竹(下女) お鍋(下女) 金藏(上田村の農夫)

半兵衛(大阪新奴油掛町八百屋伊右衛門の養子。お千世の夫。三十七歳)

駕籠昇

梗概

上田村(京都市伏見の南)の裕福な農家嶋田平右衛門は、妹娘お千世を大阪新奴油掛町八百屋半兵衛の妻に縁附け、姉娘お輕と養子掬平六との三人家族に、數人の下女下男を使つて安樂に暮してゐる。平右衛門は寄る年波に身體衰へ、俄に病の床に臥した。平六は淀川筋新田開きの訴訟の爲に京へ上り、下女下男も外出してゐる際、お千世が駕籠に乗つて來た。お輕はお千世が父の病氣見舞に來たと思つたが、其の實姑に離縁を迫られて戻つた事を聞いて驚き、お千世が三度も嫁入して皆居附かれぬを敷き且つ戒めた。

折から嘗てお千世に懸想した金藏は、淀川堤の茶屋で、お千世を乗せて來た駕籠昇から、お千世が離縁された事を聞き、平右衛門方に立寄つてお輕に逢ひ、「親爺さんの病氣見舞に來た」と言ひながら、お千世の離縁を語つて抑捺する。その時奥から「輕よ輕よ」と呼ぶ親の聲が聞えたので、金藏「これはしまつた、親爺さんが起きられた。金藏が見舞に來たと傳へて下され。又明日お見舞申さう」とて歸る。

お輕は「父様の御目が覺めた」とて、障子を明ける。其の跡からお千世も差覗き、父が病に瘦せ衰へて、蒲團に凭れた姿を見て堪へかね、「なう父様、お藥召上つて今一度達者になつて下さい」と、思はず聲を立てて泣く。父も涙ぐみ、「大事ないつつと

寄れ。また離縁されて戻つたな。前から何事も皆聞いた。己も若い時は、娘が離縁されて戻つたなら、寄せ附けまいと思つたが、年寄つては氣も弱り、可愛い子の事が彌増に案じられる。幾度離縁されても、これも前の世の約束事と思ひ諦めれば、悔みもせぬ憎うもない。人が笑はうと誇らうと指差さうと、子の不便さには換へられぬ。半兵衛は墓參の爲、濱松へ行つた留守に去られたとか、それも姑と相談してした仕打に違ひない。萬一半兵衛が此處へ立寄つても、物も言ふな顔も見な。くよくよと思ひ煩ふ事はない。彼より百倍もある大家へ屹度嫁入させてやる。お腹も減つてゐるだらう。お輕よお千世に晝飯を食べさせよ。お輕「これお千世、父様はお叱りなさらぬ。お側に附いて御介抱申しや」と、お千世と入替つて勝手へ行く。

この時半兵衛は、濱松からの歸途平右衛門方に立寄り、お輕に逢つて挨拶しても無愛想なので不思議がる。折節お千世が、「姉様お藥を温めてよ」と出て來た。之を見た半兵衛は、「ヤアお千世爰にゐるか」と聲を掛けたが、お千世は聞かぬ振して父の居間に入り、障子を引立てた。半兵衛「お輕様、お千世はいつから爰に來ましたか。餘所々しく何故物を申しませぬ」。お輕「それは貴方の心にお問ひなされ。ハ、ハ、ハ、をかしや」と苦笑したので、半兵衛は思案にくれる。

奥では父の聲、「寢てばかりるては退屈ぢや。お千世よ、其の棚の本の中から平家物語を出して、母の刀自が娘の祇王を教訓する所を讀んで聞かせよ」。お千世「あい、ほんに其處に某の紙がはせてござんする」として、押開いて讀む。父「姉も聞け。祇王をお千世に引較べていふ時は、清盛入道は八百屋半兵衛ぢや。其の入道の心が變つて祇王を追出す。エ、憎や入道、去年聳入した折、地頭代官の外には嘗て頭を下けた事のない我が、心からお辭儀して娘の一生を頼んだ。其の時彼は「我は武士の生れ。一生連れ添うて御心配を掛けませぬと申すからは、誓つて詞を違へませぬ」と言つたので、其の嬉しさに厚く禮を述べた。然るに濱松へ出掛けした後で、お千世を姑に追出させ、養ひ親が離縁したやうに見せかける。誠に義理も法も知らぬ不孝者め」とて、罵つて涙にくれば、お輕もお千世も共に泣く。

半兵衛はこれを聞いて驚き、「エ、情ない女房、既に二年も連れ添ひ、腹には子までなした仲なるに、まだ夫の心が知れぬか。

言譯すれば却つて養ひ親を悪者にする。親父様に誓つた詞を違へぬ武士の根性を見せる。見て、疑を暗れ給へ」とて、自害しようとしたが、平右衛門に諭されて思ひとまり、お千世を連れて歸らうとする。お千世も喜んで歸り支度に取りかかる。父も嬉しがつて懇ろにお千世の事を頼み、前途を祝して訣別の水杯を取りかはし、焚いて送つた門火は、やがて無常の煙とならうとは、後に思ひ知られた。

評

お千世は裕福な農家に生れ、両親に愛育されて、安樂な星霜を送り、性質の素直な、容貌の美しい妙齡の娘となり、前途に新しい望みを抱いて、大阪道修町伏見屋太兵衛に嫁した。然るに太兵衛は思ひがけぬ放蕩息子であつた爲、忽ち破産の憂き目に遭うて、夫婦別れの嘆きを見た。其の後お千世は再び嫁したが夫に死別れ、涙にくれて生家に戻つた。両親は可愛い娘の傷める心を轉じさせようとして、更に良縁を尋ね、大阪新鞆油掛町八百屋半兵衛に嫁入させた。結婚三度目の弱みあるお千世は、夫や其の舅姑に真心を籠めて仕へた。が邪険な姑はお千世を苦しめ抜き、遂に半兵衛の留守中に離縁を迫つて、其の親里に歸した。平右衛門宅の場は、親子・姉妹・夫婦の情愛を巧に書き分けて、薄命な女の悲哀をしみくと感ぜさせる妙文である。

この中之巻を紀海音作「心中二つ腹帯」第二(八軒屋の船着場)と比較すれば、理智に偏した海音と、人情に富んだ近松とは、其の構想に於て大差がある。文學上の價值から見ても、海音は近松に到底及ぶものではない事が知られるであらう。

中之巻

○五月雨・落し水 「謡曲盆踊歌」河内の郡に「さつき雨は恋しのはれて、いまはあき田の落し水」とある唄に據つた。

○とくく 字の讀いて落ちるさまをいふ副詞。これに「疾くく」をいひかく。

○玉水 綴喜郡井手の邊(京都市伏見の南、奈良

五月雨程戀ひ慕はれて、今は秋田の落し水、軒の玉水とくく、ござれ繁々、

街道の二階で、玉水の井と有名な井があつた。

○上田 玉水附近の村名。

○綿車 綿繰車。絲車。

○はへ 俵なごを積むに、一坪ほどの地に杉形に積重ねること。「和漢三才圖會」卷十五、橋本大路の條に「蘆はへる」凡材木及米俵積層皆曰「推、从手」从「立、俗附會用之也」。

○五つのたなつもの 五穀。「たなつもの」は田成津物の義といひ、或は種つ物の義ともいふ。稻、麥、粟、稗、豆。

○蓬萊の島田氏 蓬萊の島を島田氏にいひかけた。島嶼は蓬萊島を換したものであるといふ。即ち洲渚の邊の上に、松・竹・梅などを作り立て、鶴・龜・翁・徒などを飾つたもの。

○秋霧と消え 秋霧の消える如くに、秋の頃次第に衰弱して病死したるをいふ。

○鳥飼 福津國三島郡鳥飼村。

○れつき れき(歴)に促音、つゝの添加した語。身分家柄のすぐれてゐる事の意。

○いりまい 入米。米の收入をいひ、轉じて廣く收入の意。

○萬事限りの俄病ひ 俄に死病に罹ること。

○抄も行た 抄取つた。近松作「女殺油地獄」下之巻に、「掛念に行門出に抄、行の立瀆」。

○すや 安らかに寐入るさま。

○女房 お輕をさす。

○ちよびかは ちよこくくと忙しく立働くさま。

ござれば、名の立に玉水近き、山城の、村は上田に家富みて、庄屋に並ぶ葺屋根

も内温かに下女、竝んで紡ぐ綿車、手廻りもよく幾はへか庭に五つのたなつ物、

積蓬萊の嶋田氏、平右衛門といふ大百姓、妻は去年の秋霧と消へても残る娘二人、

惣領輕に入聲を鳥飼より呼迎へ、妹千世も大坂にれつきとしたる聲取て、身の入

米は上田の田島の世話を焼き止めば、萬事限りの俄病ひ、姉のお輕は側離れす臺

所には女子共、何と今朝から仕事の抄も行たではないか、ちと休ふお竹お鍋」と

呼連れて、思ひくりに立出る、親のすや、轉寐の隙を伺ひ女房は、心忙しく奥

より立出、是々臺所に人が獨り無い、連合ひ平六殿は淀川筋、新田開きの御訴訟

に、大事の病人振捨て、の京上り、男共は皆野へ行エ、憎い女子共、我見る前で

はちよびかはして、ちよつと立ば早何處へ、大切な主の煩ひ薬一ツ温めふ共せぬ、

下々には何が成圍爐裡の下焚附ぬか、次郎よ」と呼廻す門の口、駕籠昇据ゑ

て「申々、大坂の新鞍八百屋伊右衛門様から」と、駕籠の戸明くれば打萎れ目元

であらうの意で、淺ましく思ひ歎息する詞。近松作「丹波與作待

から見世囃し」。

○下々には何なる 下女下男にはさう云ふ者なるの

夜のこむろがし中之巻に、「おじやれの身には何なる、朝の夜

○しばよる 鐵笥(しわよる)。これを箱籠にか
けていふ。「しばはしほり(絞)の語根で、鐵の意。
○抱帯 婦人のしごき帯。(見索引)。抱帯は通例
二重まはり(にじゅう)に纏ふのである。

○涙の色に染かへて 涙に濡れて染色が濃く
見えるから、かくいふ。

○駕籠の者 駕籠界。近松作「博多小女郎波枕」
下巻に「石薬師から来る駕籠の者解掛けて」。

○敷居も高く 心に恥ぢなぞして、人の家に入
りにくまをいふ。

○おぢやつたか ござつたか。来てくれたか。
○隔心がましい 他人に對するやうに遠慮が
ましい。身寄りの者であるから遠慮はいらぬ。

○ヲ、道理…お目にかかりや 姉お輕の
詞。

○高麗橋 大阪市東區内の町名。

○常盤町 大阪市東區内の町名。この町内に山
城屋まで、お千世の從兄弟(いとこ)の宅がある。

○典藥 往時、宮中又は將軍家などの醫業の事を
掌つた者。こゝは京都御所方に勤める醫者をいうた。

○中蓋 大きな中位の櫛。「和漢三才圖會」卷三十
一、髻(わんじ)の條に「中櫛一名蓋蓋(カサ)」。

○よそひ 裝。器物に食物を盛つた數にいふ辭。
近松作「持精天皇歌家法」第五に、「打人れ飯六よそ
ひ」。

○本復 病氣の全快すること。

○すつべり さつぱり。すつかり。

※しばよる、縮緬の、二重廻りの抱帯涙の色に染かへて、泣く／＼出れば駕籠の者、
「櫛かに御届け申た」と言ひ捨て歸るも足早成、親の家さへ女氣の、敷居も高く
越かねてゐむ有様姉は見附、ヤアお千世おじやつたか、定て御病氣の見舞ならめ、
よふこそ、何故駕籠の衆留めやらぬ、餘所外でも有やうに隔心がましい、酒一ッ
進せて去なしやいの、それ呼戻しや」と言へ共妹はさし俯向き、歎けば共に歎か
れて、ヲ、道理、疾ふ知らせんと思ひしに、此病ひでは死なぬ、氣の取りにく
い舅姑持たお千世、髻半兵衛も忙しい時分、聞たり共自由に来ることは成まい、
案じさするも不便沙汰するなどの、病人の氣にも逆らはれず、高麗橋の伯母様常
盤町へも知らせぬ、氣遣しやんな京の御典藥に替へてから、めつきりと藥も廻り、
今朝も粥を中蓋に三よそひ、病ひは請取て癒すとのお醫者様の請合は、本復も同
じ事、其方の顔御覽なされたら、いよ／＼父様の病ひはすつべり癒らふ、嬉しい
嬉しいお目にか、りや」と有りければ、エ、父様はお煩ひか知らなんだ、いつ
からの事でござんする、ヤ何じやお煩ひ知らぬか、そんなら其方何しに來た、
何悲しうて泣ぞ、ア恥かしや又去られて」と顔押隠し咽び入、姉も驚く顔に血

○輕々 輕々(かろく)しく。

○道修町 大阪市東區の町名。今は「もしようまち」と呼ぶ。

○ふじやう 正しくは「ふぢやう」(不定)である。定まらぬこと。たしかならぬこと。うはき(浮氣)。

近松作「生玉中」の正本(七行四十七丁)の古刊本中の卷に「おまへの心が不定で外を家になさるゝゆへ」とありて、不定に「ふじやう」と傍訓してある。

○身體 身代である。西鶴本などにも身代を身體と書いてある。財産。身上。

○イみもない 身を寄せる所もない。家計を支へられぬをいふ。

○風下に居るな 風儀を受けるな。

○念に念をつがふ 念を入れた上にも念を入れて言ひかはず。

○よう戻りやつた…お悦びなされうぞ 反對を言うて戒めた皮肉の詞。

○物しやんな 物言ふな。

○跡の月 前月。

○濱松へ 濱松へ行かれの略。

○道具 お千世が嫁入に持つて来た道具。

○只もない身 懐胎の身。

○酷い辛い 酷い辛い目に遭つたの略。

を上、なふお千世、五度三度の聳入嫁入も世に有習ひとは言ひながら、悪ひ事は

手本にならぬ、恥かしい〜と口でいふばかりが恥を知つたと言はれふか、其方

も輕々三度の嫁入、尤初の男道修町伏見屋の太兵衛殿、心ふじやうに身體を持崩

し、イみもない様に成果飽かぬ別れ、其次は死別れ互に難はなけれども、人は其

方の辛抱が無い故に、去られた〜と非難附、此度の嫁入も追出さるゝに間はあ

るまひ、忘れても嶋田平右衛門が娘の風下に居るなど、娘持た人々は寄合茶呑み

咄にも其方の噲、ま一度戻つては親兄弟、人中へ顔が出されぬとは知り抜いて、

火に入骨を碎かるゝ共歸るまい、ヲ、必らず去られて戻るなど、念に念をつがふ

た今度の嫁入、よふ戻りやつた父様お聞なされたら、お悦びなされうぞお顔見せ

る折が有ふ、必らず聲高に物しやんな、して半兵衛が暇の狀取て戻りやつたか、

「いや跡の月半兵衛殿、父御の十七年の弔ひのため、生れ古郷遠州の濱松へ、戻

り次第道具に添へ暇の狀は跡から、先往ねと譯も言はず、お腹に四月只もない身

を、姑御が手を取て駕籠に引摺り乗せ、酷い辛い」とばかりにて嘆を見れば痛々

敷、子の有ものを夫の留守暇くれる姑、心に一物有はいの、伯母聳ながら其方の

○此方の人 お輕の夫平六をさす。

○詰開かせ 是非を乱させ。談判させ。この語もど兵法の語から出た。

○親は泣寄り 骨肉の親は、共に不幸を悲しんだり、悲しみに同情したりして、安樂さとの意の諷。「毛吹草」に「廣き野も親は泣寄りの雉子かな」。

○金藏 この男は去春お千世を妻に迎へようとして重絶された。その遺恨を含んで雜言をいふ、品性の低い男である。

○堤の茶屋 淀川堤の水茶屋。

○たしなましやんせ 慎みなされませ。

○同じくは 話されたまで聞くでなし、話されぬも同じく聞かれは、いつそのにや。

○氣の毒 心の煩悶の義。我が心を苦しめること。氣の毒の反対。

○田地 男は女の腹に風「たれ」を續附けるものとして、女の腹を田地に喩ふ。

親分、高麗橋貳丁目川崎屋源兵衛殿差置で、直に爰へ突附る仕方も悪し、よいよ
 い、此方の人が京からの歸りを待て詰開かせ、大抵で暇は取ぬ、とは言へ世上の女
 夫中、去るといふ事誰こしらへ憂い目をさせる可愛や」と、歎けばわつと泣出す
 聲、「ア高い〜障子の彼方父様の寐入はな、泣な〜」と言ひつゝも、傳ふ涙の
 血筋として親は泣寄哀れさよ「平右衛殿御氣色今日はいかゞ」とつゝと入、同じ村
 の金藏、お千世はちやつと姉の陰、見附られじと身を隠せば、「ア、隠れまい〜、
 たつた今堤の茶屋で、大坂へ戻り駕籠の咄で聞た、お千世殿めでたい、去られて
 戻らしやつたげな」と、口も氣儘の途方なし、お輕ははつと餘所よりも親の聞耳
 憚りて、「金藏様たしなましやんせ、鬮はなし聲低に言ふても濟む事、千世は去ら
 れは致しませぬ、親の病氣を見舞の戻り、奥には父様すや〜と寐てござる、目
 を覺して下さんすな、低う〜同じくは往んでもらひたい」と、氣の毒がる程な
 ほ聲高「親仁寐てか面白いなんば隠しても慥な事聞て居ます、お千世殿幾度でも
 去られさつしやれ、あれこれの聲達が踏み廣げた田地でも、百姓の女房には大事
 ない、己が持て一夜さも淋しい目はさせまい、去られて戻つた悲しいと氣を腐ら

○惚れかかつた：足は止まらぬ 自分
がお千世に執心をかけてゐるから、お千世が他に縁
「とつ」いでも居附かれず難縁となる。
○入毎々 嫁入しても其の度毎に。「入」は嫁入
の略。

○鼻 自分。「偶言集覽」に「鼻様」余云事を目
負してかく云、鼻ははかりも云、自字は古の鼻字な
り、余をみづからこもいへるは、鼻といふ俗語に叶
へり。この鼻がなご、自分の鼻を指して自分の
ことをいふ。

○冷す心：手を打ち 平右衛門に聞えては
ならぬと、心の奥にひやくするのこ、平右衛門が
奥で手を打ちをいひかく。

○南無三 南無三寶の略、辛い時に三寶（佛法
僧）の救助を乞ひ祈るにいふ詞から導じて、失敗し
た、しまったと思ふ時に發する詞。

○日を見て 縁組によい日を選んで。
○誰が狩す：落ち来るしし 病氣の爲に
肉落ちて瘦せ細つた意に、誰も狩してはゐないのに
鹿が逃げて来るといふを、いひかけた文飾。「返」「狩」
「鹿」は縁語。

○なう父様：下さんせ お千世の詞。
○子に運ぶ：千里萬里も行く 語に「親は
千里に行くとも子を忘れず」といふ。

○親の心の有難きをしみくご職せさせる妙文であ
る。

○行歩 歩行。この文は、五十歳になれば足も
弱り、歩行も思ふやうにはできぬがらの意。

し、必ず女房振損ふて貰ふまい、去春貰ひかけた時、己が方へござればよいに、惚
れか、つた一念脇に足は止まらぬ筈、入毎々戻るといふも、此鼻に縁が深いから
じや、親仁殿に言ひ込で今日からでも我ら請込む、姉御大事にかけて貰ひましょ
と、喚けば二人は死入ばかり、冷す心の奥に手を打、「輕よ〜」「あい〜〜」
「南無三親仁起きられた、金藏が見舞ふたと言ふて下され、又明日御見舞申そふ」
と歸れば輕は腹も立、是々往なすと千世をお貰ひなされぬか、「いや〜言ふて
も大事の縁組、日を見て申出そう」と滅らす口して立歸る、「父様お目が覺めたか」
と、姉が障子を明くる跡より千世も怖々差覗けば、夜著に凭れて起臥も、惱み苦
しき老の坂、誰狩すとは無けれども、落来る肉に顔荒れて見かはす親の顔と顔、
堪へかねて「なふ父様、お藥あがつてま一度、達者に成て下さんせ」と、思はず
知らず聲立て、さめ〜、歎伏しまろぶ、父も見る目に涙ぐみ「大事ないつ、と
来い、つ、と寄れ」と膝近く、又去られて戻つたな、子に運ぶ親の心居ながら千
里萬里も行、ましてや一ツ家の内、寝ても寐られず最前より何事も皆聞しぞ、そ
も我ながら斯くも心の變るものか、五十といふ年の内は行歩心に任せずながら、

○月も寄り日も寄つて 月に日に老衰して。

○おろか おろそか(疎)の義いふに足らず。

◇懸運に唄はれた人は、煩悶憂苦しても免かれる事
が出来ぬよつて之を前世の約束と思ひ諦めれ
ば、心を睡くする事から免かれて悟を聞き、光明を
認められ、佛の説かれた因果の理や煩悩即菩提
は之である。

○うせて 失せて。行きて。近松作、女殺油地獄」
に「きりく失せう、初めふこが食らひ足らぬか」。

○うせたりとも 来ても。「うせる」は「おはせ
る」「わせる」「うせる」と轉訛した語。近松作「曾根
崎心中」に「徳兵衛めがうせまつかいまに言ふこ
ても、必ず真にしやるなや」。

○中食 ひるめし。晝食。當時も現今の如く普通、
朝午(ひる)夕三度の食事である。

○日本一 この上もない意。至極結構。この語
は筋曲などに多く見ゆ。

○何方と答へ入るを見れば 何方と答へて
取次ぎながら、訪問客の入るを見れば。

○どまくれ めんくらひ。あわて、まつつき。

「どま」は意を強める一種の接頭語、「まくれ」は目暗れ
の義であらう。

○沓脱 沓脱石即ちふみたん石。「この文は、沓
脱石にあがつて草鞋の紐を解くと、心も打解けるこ
をいひかく。

心は若かりし昔に變らず、氣も強く義理にも引かれ、己れ重ねて去られたらば、
顔も見らまじ物言ふまじとの我もありしが、六十に足踏込んで年ばかり寄るで
なく、月も寄り日も寄つて病ひには絡まる、身の衰ふる程彌増しに案じらる、
は子の身の上、三度は愚か百度千度去られても、去らるゝに走りし前世の約束と
思ひ諦むれば、悔みもせぬ憎ふもない、笑ふ人は笑ひもせよ、誘らば誘れ指もさ
せ、子の不便さには換へぬぞ」と老の、繰言息弱り、半兵衛めは遠州へうせて留
守の内とな、其留守合點、萬一うせたりとも物言ふな顔も見な、彼奴が身上百倍
の所へ嫁入させる、苦に持つて煩ふな、のふ姉下々は野へ行つらん、茶沸かい
て千世めに中食させてたもれや」と、餘念なき父の顔、姉は悦び「コレお千世、
案じた父様の御機嫌日本一、お側離れず御介抱申しや、嬉しや胸が開けた」と、
障子を引立、勝手へ、出る折こそあれ、門に物申頼ませう、「何方」と答へ入
を見れば千世が夫の半兵衛、さてこそ縁を切に來たと、思ふ心に口どまくれ、「去
り様よふござつた」と、言へども何の氣も附かず、旅出立の儘笠取て沓脱に草鞋
の紐心も解けて「ヤお輕様、何方も變る事有まい、國元へ參時分は事急にて知ら

○親ども 養父母(伊右衛門夫婦)をさす。

○とつてもつかれず とも話し相手にされず。

○せぐるし聲 せま苦し聲の義、息苦し聲。
「様訓察」に「せぐるし俗語也、嘔氣をいへり、塞奉の義なるべし、せぐるしこもいへり」。

○何處に來て聞かぬか 何處に居る、愛へ來て聞かぬか。

○うせぬか 來ぬか(既出)
○いらたて 「いらたて」の誤であらう。

せも致さず、氣の附かぬ親共留守の内にもさぞ御無沙汰、拙者も無事に遠州より只今罷歸ります、フウそれはな、御奇特に能ふお歸りなさるゝと、顔を背けて鼻あしらひ、「男共女子共誰ぞお茶でも上げぬか」と、内に居ぬ人呼立て無益し顔の色合を、見て取ながら半兵衛、立も立たれず子細は知らず、互の心隔ての障子さつと明、「姉様お藥温めて」と出るは女房「ヤアお干世、爰に居るか」を聞捨て物をも言はずつゝと入、障子をはたと引立たり、「お輕様あれ女房、いつから爰に、何故物は申さぬ」と騒げども、物言はぬ譚聞たくは此方の心にお問ひなされ、人の知つた事のやうに、ハ、ハ、ハ、ハ、おかしい事では有」と、空笑ひ取てもつかれず、「ムウ、〜」とばかり差俯向き胸、突くより詞なし、奥には親のせぐるし聲、「夜短で日の長いは老人の身によけれ共、それも息災で駈け廻る時の事、病老けて日の長いは、扱々退屈で暮しかぬる、干世よ棚な本下して何成共讀んで聞せ、輕は何處に來て聞かぬか、我伽せぬかうせぬか」と、忙しく老の氣の音立て、「あい、爰に仕事しながら障子隔て、聞きます」と、さすが半兵衛を捨て、も立れず障子の側に立寄れば、「ヤ親仁様御病氣か、容態見たしと言はんとせしが、無待遇

○伊勢物語 何人が業平の歌を本とし、其の前後に面白く文を取附けた平安朝時代の物語の本。

○塵劫記 吉田光由の撰で三卷より成り、算學書である。初版は寛永四年である。この書は當時盛んに用ひられた。

○網嶋の心中 近松作「心中天の網嶋」をいひ、本書中に収めてある。

○徒然 吉野朝時代の人吉田兼好の作つた「徒然草」をいひ、隨筆書である。

○平家物語 鎌倉時代以後に出来た軍記物で、作者は稱讚前司行長といへども、誰人かの手に亘つて改修されたのであらう。

○祇王が段 「平家物語」巻第一、祇王事とある條をいふ。

○母の刀自 男女のならひなり 「平家物語」巻第一、祇王事の條に出てるる文である。

○入道 淨海入道平清盛をさす。

○やがて すぐ。おきに。

○あからさまとは思へども かりそめの契りとは思へども。

○男女の習ひ 男女の中のならひ。

○しばし しばらく。

○舞入 結婚後、夫が初めて其の妻の實家に行くこと。

成氣をかねて、詞を止め折を待共まらふに摺寄すりよ聞居きゐたり、千世は數多あまたの本取出し「伊勢物語・塵劫記、父様の側に有あまい網嶋あみじまの心中もござんする、徒然とら・平家物語なふ父様とさま、どの本がよからふぞ」、「姉が讀みさいた平家物語、祇王ぎわうが段だんを聞きふ讀みやれ」、「誠に紙を附つけた所ところが有あり」と押開おき、「母の刀自とぢ泣なくく又教訓けうくんしけるは、天あめが下に住すまん者もの免とも角かども入道にらうの仰おほせは背そむくまじき事ことで有あるぞ、千年萬年と契ちぎる共ともやがて別わかる、中なかも有あり、あからさまとは思へ共長ながらへ果はつる事ことも有あり、世に定めなきものは男女なんにょのならひなり、ほんにそうじや」と讀みさして、我身わがみにあたる憂うれき涙なみだ止め、かねてぞ泣居なる、父も不便ふびんに目をしばし、「昔も今も人の氣の、移り易やすき世上じやうじやうの習ならひ、コレ姉も聞きけ、平家物語を千世ちよが身に引較ひきくらべていふ時は、清盛入道は八百屋半兵衛、祇王ぎわうは千世ちよが身の上うへよ、その清盛が心變こころつて追出おす、エ、憎にくや清盛去年こぞ舞入まひせし折せから、不調法ふてうはうな娘を進上ま致いたした、氣に入らぬ事あらば打擲うちたき縛しばり括くつても直なさせ、末々すま迄までも見捨すて添そふて下くだされかし、此度こゝろ共に三度の嫁入よめい、在所ところは一つ所ところ々々にて、又歸かへつては平右衛門二度人ふたひ中へ頬ほが出でされぬ、娘は氣に入らず共我ともがを不便ふびんと面倒めんどう見て、必かならず去さつて給たまはるな、「ヲ、去さるまひく御臨終おんりんじゆうの折

○不便と 不便と思ひ。

○先輿：半兵衛 近松作、大穀油地獄下之巻に「兄弟の男子に先輿陳喪昇かれて、天暗れ死光「しにばかりやらうと思つたに」とある。

○武士冥利商ひ冥利 冥利は、冥々の中に神佛の利益を垂れ給ふこと。偽るとききは冥利に盡きる意で、これを其の人の身分または職業の下に附けて、櫻城冥利、武士冥利、商ひ冥利などいうて、自誓の詞に用ひる。

○地頭 もミは、藩領制が將軍になつた時、大江廣元の建議によつて設けた、租税を徴収する官人を用うたのであるが、後には一區域の土地の領主をいふ。

○代官 江戸時代では、幕府直轄又は藩主の支配下の年貢、公事、人別等を管理する地方官をいふ。

○出かはし 出て行つて其の場を避ける。

○我あ 「わがあしであつて、「わがしの延音。田舎詞の口吻をうつしたものだ。

○死んだ母 千世の亡母。

○不孝者との一言からは 親仁様が、我を不孝者と思はれた其の一言からは、自分は存せぬ事であつても、お千世の離別に就いては申開かないで、我が身に引受けませう。

からは、先輿は平六殿、跡輿は此半兵衛、眞實の子を持たと思召せ、今こそ町人八百屋の半兵衛、元は遠州濱松にて山脇三左衛門が悴、武士冥利商ひ冥利、千世は去らぬ氣遣するな、ア、辱いと手を束ね、地頭代官の其外に、一生下げぬ頭を下げし互の契約、物忘れする老の身にも、其時の嬉しさは骨身に染みて忘れぬ物、若いなりして忘れしか忘れぬ證據、其身は實父の弔ひに託け、遠州へ出かはし其跡で姑に追出させ、養子の親に我あ罪を塗附る不孝者、義理も法も知つた奴か、あれが何の武士の果、鯉節の削屑、人でなしめに縁組んで可憐娘を棄てたな、ろくに吟味もせなんだかと死んだ母が彼の世から、恨召されふ口惜しい」と慎み深き堅親仁、悪口交りの口説き泣二人の娘も正體涙、「兎角男に縁のない、生れ性か」とばかりにて聲も惜まず泣居たり、「扱は女房去られて爰へ戻つたか」と、始めて驚く半兵衛胸に磐石据へたる如く、呆れ返つて涙も出さず暫し詞も無かりしが、「エ、情ない女房、たとへ一言一宿の附合にも、人の心は知るゝもの、まして足掛二年の馴染、子迄なしたる夫の心、知つても言譯してくれぬか、親仁様の御立腹申開くは知つたれ共、我罪を養親に塗附る、不孝者との一言からは、ゆめゆめ

○性根 も「正念」であらう。根性。

○面打 つらあて。近松作「松風村雨束帯鑑」第一に「契りも今は偽りの、憎い男の面うちなれば」。

○體も戻さぬ 亡骸も自分の蓋提所に葬つて、妻の實家には戻しません。

○盡未來 未來のある限。未來永遠。「地藏本願經」に「盡未來際云々」。

○抱帯 婦人のしごき帯。(既出)。この抱帯は後に夫婦情死に用ひられる用意の帯である。

○しどなき 「しづ(縁)なき」の轉か。「しどもなさ」「しどけなき」といふ。靜に落着きの心がないうこと。心亂れて落着かないこと。

○かとも言はず 親父の病氣を氣遣ふこともなされて、見捨てて歸るのもどうか、案ずるやうな言葉もなく。

○叶はば 見せる事ができるなら。

○取締めのない 締括りのない。心にしまりの無い。

○眼塞ぐ 死ぬ。

め存せぬ、我ら去りは致さぬと申分くる程不孝の上塗り、親仁様につがひし詞違へぬ武士の性根を見せる、見て疑ひを晴れ給へ」とすはと引抜く脇差より、お輕は早く緋り附千世も驚き「なふ悲しや、此方様に恨みはない」と障子引明け走り寄り、止めても止まらぬ男の力「父様頼上ます」と、騒げど騒がぬ平右衛門、「お身が居るとは知つての當言、耳に留まつての自害か、ヲ、好い分別、自害して死んだらばあれ見よ八百屋伊右衛門夫婦、嫁を憎んで去りし故子は面打に自害せしと、養子に悪名難を附、口々に取沙汰せば手柄、止めるな娘存分に自害召され、見物せん」との一言に孝心深き肝を拉がれ「ハアそうじや誤つた眞平」と、額をすり附身を悔み、然らばお暇千世も同道いざお立ちやれ、「エイやつぱり私を女房に持つて下さんすか」、「ヲ、たとへ死んでも體も戻さぬ、盡未來迄女夫夫婦、「ア、忝い父様姉様も悦んで下さんせ」と、早締直す抱帯先を手繰つて躡り寄る、父ははら〜涙に咽び、半兵衛は見や此しどなき、歸らんといふ嬉しさに、親の病ひをか共言はず、悦ぶ顔を見る親の、心の内の嬉しさを、叶はゞ見せて禮言ひたし、取締めのない愚か者伊右殿夫婦の氣には入まい、頼むは其方の心一

○十廿 十兩二十兩。

○烟鍋 酒をあためる器で、察(つる)注口がある。「東雅」卷之十一に「今笈酒之器をカンナベミといふ。」

○水杯 執別の時などに、水を酒に代用して酌みかはずこと。

○酌めども 水酒盛 諸曲(理々)に酌めども盡きず飲めども繼らぬ秋の夜の杯。

○八功德池 極樂淨土にあつて、八功德を具する池水。「八功德」は「俱舍論」に、甘、冷、軟、輕、清淨、不臭、飲時不損喉、飲已不傷腸、の八つを擧げてある。

◇この所、生別は遂に死別となる體の知らせである。

○二度詞も交はされぬ 「さらば」も、別れの挨拶をして仕舞つたのであるから、かくいうた。

○つど 都度々々。こまかく。一つく。

○門火 葬禮の時、門前で焚く火。「頼氏家訓」に「喪出之日門前焚火。嫁人する女を送り出す時も、生きて返らぬといふので、葬禮の儀式にならつて門火を焚く。この文も、生きて返らぬ爲に門火を焚いたのである。

○忌々しい 縁起が悪い。

○下燃え 門火が下から燃上るをいふ。名残を惜んで思ひ燃れるをいひかく。

○無常の煙 火葬の煙。墓所を無常所といふ。

○三重 (見索引)。三重の所は、「なりにけり」などいふを略したのである。

親は老病み明日知らず、冥土の底の底迄も心にかゝるは千世一人、明日が日眼塞

ぐ共、姉夫婦に屹度言ひつけ十廿の金の取遣り、いつ何時でも事缺かせぬ、随分商

ひ手廣くして娘が事を頼入、契約の杯せん銚子く、姉よ酒を切らせしか親子の

中に遠慮はない、酒と思ふ心が酒烟鍋に水持て来い」と、杯の出る間も焦る、は

子故の闇、引受けくすと干し、半兵衛差そふ」親子夫婦が水杯、差いつ差

されつ酌めども盡きず飲めども酔はぬ水酒盛、不便と思ふ親の氣は餘りて色に出

にける、命があらば又逢はふ死なば親子の末期の水、未來は八功德池の水此世に

思ひ置事ない、二人ながらお往にやれく、さらば」と夜著に打凭れ二度詞も交

はされぬ、親の心に身を恥て姉につどく言ひ交はし、思ひを述べて立出る、暫

し」と父は、起き上り、姉なふ重ねて戻らぬため、祝ふて内で門火たけ、忌々

しいとは思へ共親に従ふ焚火の煙、目出度ふ爰から焚きます」と、庭に焦る、下

燃への果は夫婦が無常の煙、灰に成ても歸るなと其一言を此世の名殘留まる、名

殘、行名殘長き、名殘と

下之卷 (半兵衛内。道行。)
大佛殿勸進所の前)

登場人物の主な者

- 伊右衛門 (大阪新叙油掛町八百屋) 老
- 半兵衛の舅。好人物
- お千世 (八百屋半兵衛の妻。平右衛門の次女。二十七歳) 太
- 兵衛 (伊右衛門の妻。半兵衛) 半
- 半兵衛の甥。悪人
- お千世の姑。悪人
- 太兵衛 (信婆の甥。半兵衛内の人) 西
- 念坊 (熊野屋の使者) 念
- 松 (半兵衛内の下女) さ
- 人 (半兵衛内の下女) 人

梗概

半兵衛が、大阪新叙油掛町八百屋伊右衛門の養子になった時は、ささやかな店であつたが、彼が家業を勵んだ爲に、今では商賣も繁昌し、安樂な生活となつた。舅伊右衛門は淨土宗の信徒で、寺詣でに浮身をやつし、人好しの隠居である。姑は朝から晩まで家事の世話を焼き、氣ばかり苛立つて自から邪険な者となり、半兵衛が連れて戻つた嫁の千世を家に入れなかつた。

四月五日八時(午後二時)頃に、太兵衛が青物を荷ひ、小歌を唄つて歸る。老婆はこれを見て、歸りの遅きを詰る。半兵衛も姑に口添へして、太兵衛を嗜め用事を言ひ附ける。太兵衛「私だつて遊んではるませぬ。山城屋から呼込まれて、誰やら其方に逢ひたいといふ言傳を聞いて來た。ちよつと行かつしやれ。私は得意先を廻つて來う」とて、詠物を携へて家を出た。

半兵衛は、太兵衛に言傳した者はお千世であらうと察し、姑に悟られぬやうに出掛けようとする。姑は聲を掛け、「これ半兵衛、山城屋へ行く事はなりません。氣に入らぬで去なした嫁を、其方は遠州から戻りに唾へて歸つて山城屋に預け、度々行つてはお逢ひなされるか。親の嫌ふ嫁には親切を盡し、親には不孝を盡しや、恩知らずめ」とて、いたく罵る。

この時西念坊が熊野屋の使者となつて、伊右衛門夫婦を呼びに來た。老婆は突り聲で、「親仁殿早う行かつしやれ。私や行かぬ」。伊右衛門「とかく半兵衛を敵のやうに喧しう言はつしやる。世間附合ひする若者だから、誰が呼びに來まいものでもない。

少々の事は聞遣しにしゃいの。老婆「その人好しがいけません。現在甥をさし置いて、なまじ者の半兵衛に此の家屋敷を譲る、私に刑な心はありませぬ」。伊右衛門「それは言はいでも知れた事。そのやうに腹の立つ時は念佛が樂ぢや。機嫌直して一處に出掛けよう」とて、諧謔交りに色々と諭したが、老婆は聽かぬので、伊右衛門一人出でて行く。

半兵衛は涙にくれ、「二十二歳の時からお世話にあづかり、甥御を差置いて私に家屋敷をお譲り下さる。其の御厚恩を受けてゐる母様の氣に入らぬ妻は、私から離別致します。母様が離縁なさつては、姑が嫁を悪んで去なしたと、世間では母様をよくは申させぬ。それ故に一應千世を呼戻し、私から改めて暇をやりませぬ。さすれば千世も母様を恨みませぬ。どうぞ此のお願ひを聽いて下さらば忝う存じます」とて、心切に死を覺悟し、以て妻の親と我が姑と、夫婦の情と世間の義理とを、立抜かうとする悲壯な決心を固めた。それとも知らぬ老婆は、「あ、嬉しや、其の言葉に違ひはあるまいの。欺されては生きてるませぬ」とて、出刃庖丁を示し、「これで氣が輕うなつた、非時に參りましょ。さぞ親仁さんが待つてゐるであらう。あ、南無阿彌陀佛々々。さんよ供せよ」とて、ぶつ／＼言ひつつ出で行つた。

老婆は山城屋に立寄り、故意に笑顔を作つて、お千世に戻つてくれと望んだ。素直なお千世はこれを誠と信じて喜び、いそいそとして八百屋に歸つた。半兵衛はお千世の戻つたのを見て驚き、姑に欺されてゐるを憐れみ、具に事情を語つて泣いた。之を聞いてお千世は、夫の膝に泣き崩れた。

姑は半兵衛夫婦の事が氣にかかり、夕方頃急いで歸り、「なうお千世戻りやつたか。ちよつとした行違ひから心配をかけた、いたはしやの。老いては嫁に従はねばならぬ、私は佛のやうな心ぢや。こりや半兵衛、流しの出刃庖丁研がして置いた。ちよいと觸つても命がない。あ、南無阿彌陀佛」と猶撫慰する、其の心底には、お千世が悲惨な運命に陥れかしと望んでゐる。半兵衛「こりや、さんも丁稚も能く聞け。女房ばかりは親の儘にもなりません。私が氣に入らぬ、離縁する。そちらが母の浮名を立てたら承知せぬ。これお千世今から出て行け」と、眞顔に睨む目には涙がある。お千世は伏沈んで泣く。姑「私がどう思つても、

夫が氣に入らぬものは仕方がない。必ず私を恨みやるな。泣くは私を恨んでか、恨があるなら聞きませう。お千世「いえく、お慈悲深い母様に何の恨がありません」。半兵衛「お、母に何の恨があらう。さつさと出て失せい」と、小腕取つて引出し、門口をびしやりと締めぬ。折から鳴る初夜の鐘は、諸行無常の聲に響き渡る。

半兵衛は家人の隙を窺ひ、荒布の束の中に隠してゐた短刀と、紅の毛氈とを携へて窃に家を出る。門口で、「やあお千世」。お千世「あい」。半兵衛「さあ通れ出た。連れ立とう」と手を引き、羊の歩み足に任せて、卯月五日宵庚申の群集の中に紛れて、闇の中に姿を消した。

〔八百屋半兵衛 道行〕半兵衛夫婦は闇路を辿りつつ、姑にいちめられて辛かつた既往の事を語り合ひ、親に先立つ不孝の罪を詫びて涙にくれる。道行く人の小歌を聞いては、我が身に引きくらべて感に打たれ、悄然として寺町を經、生玉馬場先なる大佛殿勸進所に辿り寄る。此處を死場と定めて、共に戒名を附け、紅の毛氈を敷き、其の上に坐して此の世の名残を惜しむ。夜明けを告げる鶏の聲を聞いて、最早これまでと互に覺悟を定め、辭世の歌を詠みかはし、半兵衛は念佛を唱へてお千世を刺し、自らも腹掻切つた。法の花・紅の蓮になぞらへた紅毛氈の上に永眠する夫婦の姿は、やがて門番の目に觸れた。深い最期を遂げた夫婦心中の噂は大阪中に弘まつた。

評

半兵衛は濱松藩士の家に生れ、五歳の時親の愛から離れ、大阪に出て他人に養育され、二十二歳で新穀油掛町八百屋伊右衛門の養子となり、具に浮世の辛酸を嘗めつつ、家業を勵んで養家を興した。其の妻お千世は上田村の百姓の家に生れて、慈悲深い親に愛育され、楽しい歲月を送つて妙齡の娘となつた。そして兩親の命する儘に、何の見知りもない男の内に嫁入した。この危険な結婚は、彼の女の抱いた新しい希望を吹飛ばして、憂愁の涙の乾く暇もなく、三度までも繰返した。

半兵衛夫婦は、身分も容貌も人並に劣らず、性質も従順眞面目であるのに、悪運に阻はれて險難な行路を歩み、果は家庭の不

和を引受けて自滅せねばならぬ事となる。吾人は彼等の此の境遇に對して、いたはしい情に堪へぬのである。

半兵衛夫婦の姑は、ささやかな八百屋店を引興すに辛勞し、氣丈な女であつただけに、己が甥を差置き、半兵衛を見込んで養子とし、愛したのであつたらう。が半兵衛がお千世を妻に迎へるに及んで、己が愛を奪はれた様に氣淋しう感じ、嫉妬の焰を燃して自から邪険な者となり、従順な嫁をいぢめたて、それが日々に深刻となつた。其の爲に半兵衛夫婦は、互の愛情や親や姑や世間に對する義理に擲まれて、煩悶憂苦を重ね、いつそ淨土に逝つて、夫婦の未了因を結ぶ事を心頼みとし、共に潔い最期を遂げるに至つた。

凡そ家庭の不和ほど心を傷めるものは、他に稀であらう。どうしたら陰鬱なじめ／＼した家庭を明るくする事が出来るか。これは其の家庭にとつて大きな問題である。家庭を早く平和に明るくする爲には、いよ／＼勇氣を以て反省し思念し工夫し、互に怵へ合つて相扶けねばならぬ。實に人生の幸不幸や一家の興廢は、かかつて其の成否にある。

我等は近松の情深い妙文を讀んで、惡運に咀はれて手も足も出ずに破滅する哀れな人々を思ひ浮べ、氣の毒の情に堪へず、思はずも眼を曇らせるのである。近松の愛の藝術の眞價も、蓋しここに存するのであらう。

お千世の最期を書いた、近松と紀海音との文を比較するに、近松は「咽の呼吸も亂るる刃、思ひ切つても四苦八苦」と書いて、斷末魔の苦の中にも、煩惱を斷つて菩提に入る情を見せてゐる。然るに紀海音は「苦しけな中にも夫を打守り、打守りたる一念の、輪廻の心ぞ果てしなき」と書いて、なほ妄執に迷へる情を見せてゐる。これ等も兩人が人生觀の相違を見せて、近松の奥の奥の思はせる。

近松が世に傳ふべき名曲の數々を残した一因は、彼が義太夫から何等の掣肘を受けずに、自由自在に靈腕を揮ひ得たからである。又義太夫はひたすら作者の立場を尊重して、其の妙文を生かすべく工夫努力し、彼の美聲を極度に發揮して、互に勵み勵まされた事にも因るであらう。斯く思へば、近松に捧げる讃辭は、これを偉大な聲曲家筑後掾にも捧げたいのである。

○日かげ 庭庇で日影を避ける意と、離縁されて公然と舅の家に戻られぬ日陰者の千世の意とをいひかけた。

○新穀油掛町 大阪市西區東下通二丁目あたり。

○了海坊 正徳・享保頃に大阪市西區北廻江上通四丁日和光寺(浄土宗、阿彌陀池所在地)に居た高僧。

○談義 對談法話。佛敎の法話。説教。

○寺狂ひ 寺争りに夢中なること。遊女に夢中なるを遊女狂ひといふ。

○べらく のんべんだらり。

○糊かひ 糊附け。布に糊を附けるを糊をかふといふ。蓋し、かふは「くはふ」(加)の約説であらう。

○取えて 取入れて。「えは」は「いれ」の約。この語今も大阪あたりで用ひてゐる。

○おねば 御根葉。菜大根の二葉の稍大きくなつたもの。まびき菜。おろぬき菜。「浪花方言」に「おねば」菜大根のかいわりの大きくなりたるなり、葉ばかりにて根は不用也。

○宵庚申 大阪天王寺庚申堂の宵祭り。

○甲子 甲子の日一年中に六つある。この夜大黒天の祭りである。

○二股大根 二股になれる大根を俗に福来といひ、福の来るを祈つて、甲子の日の夜に、大黒天に大豆及び二股大根を供へて祭りをす。「日次紀事」十一日の條に、凡諸向此月子子時祭之(大黒天)、蓋買賣之間取其利也、欲比鼠子之番息也、凡所供子之膳食、毎品加大豆、又供兩股大根、大豆

下之卷

夏も来て、青物見世に、水乾く、庭庇に避けられし、日陰の千世が舅の家は新穀、油掛町八百屋伊右衛門、浄土宗の願ひ人了海坊の談義に打込、開帳回向の世話焼仲間、見世は半兵衛に打任せ大坂中の寺狂ひ、女房は内外の世話に五つも年ふけて、朝から晩迄氣は苛立て、此半兵衛は藏にべらく何して居やる、見世の賣物が萎びる、ヤイ松め、さつくと水打居ろ、コリヤさんよ、糊かい物が干上ろがな、取へて疊んで打盤出してちよきくと打て、ヤ其ちよきくとで夕飯のおねば刻め、コリヤ松よ、今日は五日宵庚申甲子が近い、二股大根のけて置け、ソレさんよ茶釜の下が燃へ出る」と、商賣が八百屋とて八百色程言ひ附る、口せかくと忙しきは大晦日の生れかや、伯母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ、はしりの竹の子片荷には濁活・生薑・青山椒・白瓜二つ、これは扱も早い事でごさんすよの、おれが戻りは、ても遅い事でごんすよの、「コリヤのらつば、今朝卯の刻か

風之所、好食也、兩股大根俗稱「福菜」。

○市 大阪大端市をいふ。天神橋北詰上手から龍田町までの瀬側を市の側(かほ)といひ、青物などの市場がある。

○はしり 魚野菜などの初物(はつもの)をいふ。「娯遊笑覽」卷十上、飲食部に「初物を走りといふ、三年の始に走り物(鹿ノ兎ノ鳥などの走る物)を用ひし習ひ故、後には何にまれ新らしく出来る物を走りといふ事なれり」。

○これは扱も、ごんすよの 當時の流行唄、何々よのさ能くいふ、其の調子に據つたもの。

○のらつば のら。のらくら考。から(空)を、からつばといふの類である。

○卯の刻 六時。卯は六時から八時までの間。

○午下り 未の刻(午後二時頃)。

○鼻毛を讀まれる 惚れた女に愚弄される意の語。近松作「信州川中嶋合戦」に「某が頰内を忍合ひの宿にせられ、鼻毛を讀まる村上ならず」。

○天道干し ひなたほし。

○初 物を兩端に掛けて荷ふ棒。てんびん棒。

○征町 大阪市西區阿波堀通、二丁目の邊。「難波九瀬目」に「おくび町阿波座堀より二筋目、西横堀より西へ、西横堀より阿波堀筋にて行當る」。

○笹屋から竹の子 笹屋の笹の縁で竹の子をつげた。

○矢の使 至急を告げる使者。
○丹波屋から栗 丹波栗の縁によつた。

ら内を出て、何時じやと思ふ晝下り、何處で鼻毛を讀まれて居た、旦那衆の誂へ

物日覆してさへに損む時、高い物を天道干、商賣の初食はせ魂に覺せん」と

取附けば、半兵衛走り出「母じや人のがこりや尤、コレ太兵衛、何處にのらく

遣つて居た、征町の笹屋から竹の子取に矢の使、阿波座堀の丹波屋から栗おこ

せと言うて来る、朝倉屋からは青山椒内には切れる返事に困つた、大儀ながら母

じや人の機嫌直し、つい一走廻つておじや、「ハテ私じやとて何の悪ひ所に這

入つてゐましょ、横町の山城屋から呼込まれ二つ三つ咄したばかり、それも外の

事でござらぬ、此方に誰やら逢ひたいとて、今朝から爰に待て居ると言ふてくれ

との言傳、私や得意を廻つて來ふ此方もちよつと行かしやれ」と、誂へ物を取揃

へ荷拵へして出て行く、半兵衛は山城屋と聞よりお千世が來たである、氣取られ

まいと空惚げ、「ハア山城屋からは何の用、どりやちよつと行て來ふ」と走り出る

○おこせ よこせ。

○朝倉屋からは青山椒 但馬國栗父郡宿南村淺倉あたりは山城の名産地である縁によつた。「和漢三才圖會」卷八十九に「朝倉椒」按朝倉山椒始出於但馬朝倉、其谷兩岸四五町間皆椒樹也。

○機嫌 (見栄可)
○山城屋 お千世の従兄(いとこ)が大阪市東區常盤町にゐる、其の商家の屋號。
○誰 暗にお千世をさす。

○ぬつけり よぢみなく平氣なさま。半兵衛が空まほけた顔をしてゐるを待めたのである。

○こちと こちびと(此方人)。我々。

○こつてり 情交の濃厚なさま。近松作「淀屋出世徳上之巻」に「ヤアこつてり」といふ事、妓狂ひよりあの方の質人がよからう。

○やつつろ 「やつたであらう」の約説。

○十五年 後文には「養子に成て十六年」とある。

○西念坊 當時は坊主が商家の使者となつたり、遊廓に出入して遊客に交はつたり、願入坊主的の行爲をする者が多かつた。索引によつて「西念坊」をも見よ。

○宗味が刻鐘 「宗味」は鑄物師の名であらう。「刻鐘」とは鐘をいひ、鐘を撞いて時刻を報じるよりの稱。

○開眼 慧眼を開く義。佛像を鐘なごち調整した時に、高僧を招いて安置の式を行ふ、これを開眼又は開眼供養といふ。

○非時 非時食の略。午後には食を取ること。「釋林集釋」に「老學菴雜記云、佛經戒比丘非時食、蓋其法過午則不食也、而如僧招客草食、謂之非時」。

○且那寺 自己の門徒として所屬する寺。(こゝは西念寺の住持をさす。

○そそくさ坊主 そそかしい坊主。

○きりく てきほき。さつさこ。

○つごと聲 つごご聲ともいふ。蓋し「つごご」といふ(安全警報)の義であらう。とがり聲。やま

を、むすと捉へ、「智殿」ちりや何處へ、「イヤ山城屋から逢ひたいと」「ヲ、その

山城屋合點、成ませぬ、アノぬつけりとした顔はいの、こちと夫婦は何ンにも知

らぬと思ふてか、氣に入らいで去なした嫁、遠州戻りに在所へ寄り能ふ啞へて戻

つたな、常盤町の從兄が所に預けて置、商賣に託け、間がな透がな女夫こつて

り己が知らいで置こかいの、さぞ己が事譏りやつつろ、十五年世話にした、親の

嫌ふ女房に隨分と孝行盡し、親には不孝盡しや、恩知らずめ」と疊叩いて喚き居

る所へ、青布子の西念坊案内なしにすつと通り、「熊野屋の權右様から先達てのお

約束、宗味が刻鐘の開眼庵相な非時致します、講中皆お揃ひ旦那寺も疾ふお出、

御夫婦ながら、只今」と、言ひ捨歸るそそくさ坊主未來頼むは危なもの、アレ親

仁殿、熊野屋から呼に來た早行かしやれ己や行かぬ、きりくさしやれ」とつご

と聲、親伊右衛門は後生一逼、ハレ噓何を噓しい、又してもく、半兵衛さへ見

れば敵のやうに言ふ人じや、世間する若い者呼に來まいものでもない、少々的事

は聞遁しにしやいの、「ツレ其結構過たから、親をおほうに爲居るわいの、現在

己が甥の太兵衛をさし置、あかの他人の此のら殿に、家屋敷やる此母邪まは少も

しゆなき無愛想な聲。

○世間する 世間附合ひする。

○結構 懇氣のないこと。人よし。

○あはう ほかから起つた語であらう。

○のち のらくら。半兵衛を悪んでいふ。

○如來の御方便 念佛を唱へれば、極樂淨土に救つて下さるごいふのも、其の實は、如來様が下根の衆生を化益し、惑を斷じて眞理を得させる爲の便宜上の方法である。

○修羅燃す 瞋毒の焰を燃す意。怒るをいふ。

(目索引)

○ほたえさす ざれ散れさす。「辱訓架」に「ほたゆ」俗語なり、ほたえさともいへり、えるの反ゆなり、ざれたはむるを上方にほたえさといふ。

○妄語戒 五戒の一。虚偽の言語をなしてはならぬこの戒。

○五戒 殺生戒、偷盜戒、邪淫戒、妄語戒、飲酒戒。

○赤貝 女のを意味する惡洒落。

○談義 佛教の法話。(目索引)

○一蓮托生 死後諸共に同一蓮華塵上に生れること。以て難れぬことにいふ。

○同行 同じ道の修行。同僚者。「團のお同行」とは、夫婦共に寝て行ひを同じうすることの意の洒落。

○すく／＼ 直々。すつすつと。

○線／＼ 直々。すつすつと。

○線／＼ 直々。すつすつと。

ない、「コレ、鼻、それは誰も知つた事今更調べる事かいの、その様な腹の立つ時

は念佛が薬じや、兎角如來の御方便、修羅燃す其方を呼に來るも彌陀如來參るこ

ちとも彌陀如來、機嫌直しや」と慰むれば、「イヤこち女夫が出てゐて、跡へお干

世を呼入れ留守の間でほたへさす事は成ませぬ、此方一人參つて、私は俄に目が

眩ふたと成と頓死したと成と間に合に遣らつしやれ、「コレ、鼻、たつた今西念坊

が見て去んだはいの、此伊右衛門に嘘つけかア物體ない妄語戒、此中さるお寺で

五戒の割口説聽聞した、三百戒五百戒も約まる所は赤貝に止まるとのお談義、半

兵衛が叱らるゝも貝の業、そなたに己が意見するも貝の業、一蓮托生の團のお同

行」とじやれて機嫌を取れば、「そんならマア此方參らしやれ、此様な瞋毒の燃

へる時に念佛申せば咽にすく／＼立やうな、心鎮めて跡から參らふ、エ、かて、

加へてあた鈍な念佛講、こんな時は目かきかして延ばしたが好いはひの、ほん

に、此方の同行に、機轉の利いたが一人もない」と、怖い目知らぬ我儘たらだ

○あた鈍な いやな馬鹿らしい。「あた」は體態の意を示す

接頭語。

○めかりきかす 氣轉をはたらかす。見計つて氣をまかす。

す。「めかり」は「めりかり」の略であらう。「めり」は涙で音の下りをいひ、「かり」は加で音の上りをいふ。以て音の上下の調子をいひ、轉じて、ほごあひ、氣轉なごの意にいふ。

○佛法と萱屋の雨は出て聞け 家の内に
ゐては佛教の有難い法話も聞かれぬ。また萱屋の雨
は屋内では其の音が聞えぬ。寺参りしたり、外出し
てこそ聞かれる。見聞を新ににして始めて妙味を感
知されるこの意の語。

○大寶寺 大蔵生玉寺町にある淨土宗の寺院。
この開帳は享保七年春である。「攝津省所國大蔵」
卷之四に「生玉寺町の大寶寺もはじめは、今の嶋の
内にありしを、後に引移されし故、今其跡を大寶寺
町といふ」とある。

○流後の川中嶋の四段目 近松作「信州川中
嶋合戦」を竹本筑後孫が竹本座で演じたのは、享保
六年八月である。この時其の第四段目の天目山の作
り物に張りぬきの木山を用ひた。◎「川中嶋の四段
目」を見よ。

○輪敷珠 敷珠の珠の数は百八箇なれども、略
して三十六箇にする事がある。これを輪敷珠といふ。
敷珠は大小・長短、宗派によつて異なる。こゝは淨土
宗にて用ひる輪敷珠である。

○明御 太兵衛をさす。

○あだ かりそめ。おろそか。

○姑去り 姑が縁を離縁する(こと)。

○悪いになされませ 悪いからこゝ悪いにな
されませても。

○判官頼貞の世の中 源九郎判官義経を頼貞
する世の中。謡曲「淨瑠璃」小説などの文は、いづれ
も義経をあらはれんで同情し、世人も義経頼貞の者が
多い。こゝは、不運な者を憐み同情する人が多い例

ら、「ヲ、そんなら先へ行跡からおじや、佛法と萱屋の雨は出て聞けど、外へ出れ
ば又有難い事も聞、此度生玉大寶寺の開帳に築山を飾られたも、筑後の川中嶋の
四段目から出た事じやげな、こんな事も出にや聞れぬ、ア、有難い南無阿彌陀佛」
と、輪敷珠を繰りく出にけり、半兵衛一言の答もせず、涙にくれて居たりしが
顔振り上へ申母じや人、今めかしい申事ながら、武士の籠の水で育ちし此半兵衛、
廿二の年から御面倒に預り、一人の甥御を差置家屋敷商賣共、私へお譲りなさる
る御厚恩、肝に應へてあだにも存せぬ、御恩の母の氣に入らぬ女房なれば、私が
離別致してこそ孝行も立世間も立つ、所に此度國元の留守の間に、八百屋半兵衛
が母が嫁を悪んで姑去りにしたと沙汰有ては、萬々千世めが悪いになされませ、
判官頼貞の世の中お前の名ほか出ませぬ、母の悪名を立て若い者の人中へ面が出
されませうか、親仁様にも面目失はする爰が一ツの御訴訟、少しの間と思召蟲を
殺し、美しう千世めをお入なされ、其上にて私が、物の見事に去狀書いて隙やりま
す、「ホ、そこが男のかうけん、貴人高位の娘でも夫が去るに何と申せし、時には
千世めが姑への恨もなくお前を慈悲じやと言はせたい、十六年此方たつた一度

に、判官を持出したのである。

○妾が一つの御訴訟 我が身の面目を立てる爲には、次に申す一事(六ひご)を訴へ申して、お許しを請ひたいのであります。

○蟲を殺し 期願をおさへ。

○ころけん 権力、威光の意。蓋し後見の保護であらう。近松作「心中萬年草」中之巻に「親のころけん是非なうて、やうなりとも言ひました」。

○時には さやうに致す時には。

○老少不定 現世は無常の境界であるから、老人必ず先に、少年者必ず後に死ぬとも限られぬ。人の死期は一定せぬこと。この所の文は、半兵衛が既に死を覺悟したから斯ういうた。

○知識 善知識といふに同じく、迷妄の衆生を佛道に導く友。以て高僧をいふ。

○長老 長者老年の徳ある者。「祖庭事苑」に「今釋宗住持之者、必呼之長老」。

○十念 十聲の稱名念佛(南無阿彌陀佛)をいふ。淨土宗では「念聲不絶具足十念(稱)南無阿彌陀佛」の文によつて、十念を授けいふ事を行ふ。

○去る 離縁する。「去るが定ぢやの」は、離縁することが間違ひないのぢやの意。

○欺しやれば 母を欺すなら。

○ちよい ちよいと突刺す。すぐに突刺す。

○穢土 娑婆の世即ち現世をいひ、淨土の對。

○非時 午後(に食を取ること)既出。

○其の形 著物の著替などしないで其の形のまま。

の御訴訟、老少不定の世の中たとへ私が先立つても、如何成跡のとひ弔ひ百萬遍

の御回向より、聞入れたとの御一言、知識長老のお十念を授かる心」とばかりに

て、女房の親と我親と世間の義理と恩愛と、三筋四筋の涙の糸手繰り、出すが如

くなり、母ほいやりと笑顔して、「ム、思ひ合ふた夫婦合、誠らしうは思はねど嘘

に涙は出ぬもの、眞實去るが定じやの」、「ハテお前を欺す程なれば此御訴訟は申

ませぬ」、「ヲ、嬉しい〜、己も鬼には成とむない、必ず去りや、間に合言ふて

欺しやれば、コレ此母が咽笛を、出刃庖丁でちよいじやぞや、母殺すか女房去る

か、それから其方の勝手次第、ア、さらりと穢土の苦が抜けた、此世からの生

佛とは己が事、足輕ふ非時に参りましたよ、此方や未來迄退き去りせぬ閻の同行が、

さこそ待や焦れて、南無阿彌陀佛〜、さんよ其形でつい供せい、ア南無阿彌陀、

松よ、又見世のつるし食ふな、アなまみだ、南無阿彌陀佛に取交せてぶつ〜言

ふてぞ出にける、お千世が重成、五ツ月の重き身ながら足許も、手も輕々と帯の

○つるし 吊桶つるしがき。紀海著作「心中二つ旗帯」第三

にも「美濃、かな引かれては、元が息(こ)になる穿鑿」とあ

○ぶつ〜 ぶつ〜みて不年をいふさまに、佛々をいひか

く。 ○五ツ月の重き身 懷妊五ヶ月。

○丁内 町内ぢやうないである。「丁内廣うは、町内の者に懐る所なく公然この意。

○桶きな物打明けたやうな 腹藏はらぞうなきに驚る。

○女房あるじ 主婦。

○養母の陰險な心こころ、嫁の無邪氣な心こころを對比して、黑白を鮮明にした名文である。

○奥の疵 鼠がかじり明けた戸棚の奥の穴。

○湯を沸かして水になる 骨折つて何のやうにも立たぬに喩へる語。

下、小棧こつえ引上げちよこ、走はしりハア久し振びで内を見た半兵衛様、今日けふといふ今日けふ丁内廣ちやうないふ戻もどつたはいの、ア嬉うれしや」と抱附だきつけば、半兵衛はんべゑぎよつとし「何として戻もどつた、たつた今母いまははが出でられた道で逢あひはせなんだか」、「さればいの、母様ははさまの山城屋やましろやへ寄よらしやんして、いつに無い門口かどぐちからにこゝと、いとしゃく、己おれがちつとの思おもひ違ちがひで苦勞くろうさせた、今いまから去いなそのいの字いも言いふまひと心誓こころちか文立ぶんたててた、娘むすめは持もたず天あまにも地ちにもたつた一人ひとりの花嫁よめ、末期まつごの水取みづとらる、も骨捨こつりわる、も其方そなた、随分ずいぶん孝行こうぎやうにしてたも、其方そなたも己おれがいとしがる、今いまお念佛ねんぶつに參まゐるその内に早はやう戻もどつて、後のちに逢あはふ早はやう〜」ととんと桶おけな物打明ものうちあけたやうなお心、皆みな此方こなた様の言ことひなし故ゆゑと、ほんに男おとこの御恩ごおんは戴いたいで居ゐても飽あきはない、松まつよ久ひさしいな、もはや何なに處ところも蚊かが有あるに、女房にようばうあるじが無なければまた蚊帳かやの釣つり手ても無なし、アノさんが居眠ゐねりでは、袴はかまどもの洗濯せんたくも出で来きまい此戸棚このとだなの埃ほこりはいの、奥おくの疵きずもまた塞ふさがず、香かうの物ものも見廻みまわたし何なにから爲なうやら氣きがうろつく、居附ゐつけた所に居ゐて見みよ」ととんと坐すわりし茶釜ちやがまの前まへ、湯ゆを沸わかして水みづに成末なるすゑ知らぬこそ果敢はかなけれ、半兵衛はんべゑ兔角とぶかくの挨拶あいさつせず、「コリヤ松まつよ、只居ただゐずとも藏くらへ行いて椎茸ししいたけ選えれ」と人を退のけ、お千世ちよが顔かほをつく

○利發 利口發明。かしこいこと。

○跡式 「修訓集」に「後贈あとしきの義なりといへり」とある。跡目。家付。

○合縁機縁 夫婦朋友などの間柄で、互に合ふも縁、合はぬも縁。縁は兎角不思議なものであるとの意。

○いとしばなげ いとほしなげ。甚だかほいさう。

○贊 繪畫などの上に、其の繪畫などをほめて評した語文を贊といふ。「文體明辨」に「字書云、贊、稱美也、字本作讚、人物文章畫語贊、詞彙、褒貶」。轉じて批評又は惡評の意にいふ。「好色二代男」卷一、親の顔は見ぬ初夢の條に「出口の茶屋に腰掛けながら、朝歸りの客に授つくるに一人も遣はず」。

○死んだと 死んだと言はれたく。

○願以此功德 「願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國」は、念佛宗で回向文として、供養の終り頃に禮誦されるものである。この文は「回向より」に據じてこの回向文をいひ、以て結末の意をいひかけた。

つくと見て涙ぐみ、エ、可愛ひや、利發なやうでも女心、母の詞を眞實と思ふか、言やる事が皆嘘じや、さりながら昨日もくれく言ふ通り、佛法の端も聞入れ物の慈悲も知つた人、我甥を差退け他人の身どもに、跡式讓る心からは根から歪まぬ是證據、人には合縁機縁血を分た親子でも中の悪いが有もの、乗合船の見ず知らずにも、可愛らしいと思ふ人も有、人界の習はし斯うしたもの、いとしばなげに根からの悪人でもない母を、其方故に邪険者と言はせては、女夫の者が後生も悪い、母の機嫌よふ一旦呼返し、改めて己が手から去る筈じや」「エ、イ、すりやどふでも去らるゝか」「ハテ肝潰す事かいの、死ぬるは二人がかねての覺悟、養ひ親に贊も附かず在所の親の遺恨もなく、エ、流石じや見事に死んだと、未練者の名を取まいたため、母に向ひ何程の詞を盡したと思やるぞ、書置も認め死裝束脇差も、荒布の荷へ巻込、此世の心がかりは微塵程もなけれ共、金に詰つて死ぬる心中と、一口に言はれふかと、是が一ッの氣がかり」とわつと泣ばわつと泣く此方さんの孝行の道さへ立ば、私も心は残らぬ」と、夫婦手を取纏り寄り伏枕、むこそ道理なれ、母は念佛の回向より、嫁女夫の願以此功德氣がかり、餘所にゆる

○りやうげ 「櫻調茶」に「りやうげ」御解の音、合點する事也。

○はしり 蕨所のながしをいひ、物を洗つた水を流し走らすよりの稱。

○是ばつかりは佛なり 邪険な鬼装であつても、お千世が事情を聞知つてゐることは、知らぬが佛なり。

○寂は雨 死滅することをいふ。釋尊の涅槃經に、釋尊入寂の際に生類皆寄集つて泣いてゐるによつて、寂は雨といふ説が出来たのであらう。立羽不角編「千代見草」上の巻、虎毛の句に「辻占に寂はミばかり聞かす」とある、「寂は」は「寂は雨」を略したのである。

○得て ともすれば、よくありがちなをいふ。

○おぢやいの おいでよ。

○猫撫聲 柔和で嬌びる如き聲。

○丁内 町内。(既出)

○つひに行く 後に行く意に、死ぬる意をいひかけた。「古今集」哀傷那、美乎朝臣の歌に「つひに行

りと居る空も店鎖し比ヒによつと歸り、なふお千世戻りやつたか、先刻にもいふ通り、ちつとした領解違ひで物思はせたいとしやの、ほんの生如來が見たくば己じやと思や、長うも無い浮世に、酷い辛い目見て何にせうなふ厭やの、コリヤ半兵衛、走の出刃庖丁よふ磨がして置いたぞや、ちよいと觸つても劔じやぞ、ア南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」と半兵衛に相圖の詞、嫁は知らぬと思ひ込む、是ばつかりは佛なり、女夫は母の機嫌顔、見れば此世の本望と、思へどじやくは雨と降る涙隠すぞ哀れ成、コレ半兵衛何も忘れた事はないか、日の長い時は得て物忘れするものじや能ふ思ひ出しや、お千世泣かすと爰へおじやいの、まだ己が怖いか、爰へ〜と猫撫聲、アイ〜お側へ参ります」と、立寄らんとする所を半兵衛取て突退け、女房ばかりは親の儘にもならぬ、身が氣に入らぬ、去つた〜出て失せい、コリヤさんも丁稚も能ふ聞け、半兵衛が女房去つたぞ、向ひ隣り丁内でも、母の浮名を立たらば聞事でない、うろ〜せずと出て失せい」と眞顔に睨む目に涙、コレ嫁御、己や去らぬぞや、親の儘にもならぬは女夫是非がない、己を根と思やるな」と言へども何の返答も、泣入〜しやくり泣、ム、其涙は、まだ

「道とはかなくて聞きしかた、昨日今日とは思はずりしを。」

○六つ 六時日没。

○初夜 戌の刻即ち午後八時頃。「浪花方言」に「初夜」戌の刻なり、五つまでは決していはず、上下男女とも總て初夜を唱ふ。

○五六 六つ時を重ねた。

○五五八八 各月上旬中の三・四・五日は、五(辰)五(戌)八(丑)八(未)、即ち午前八時午後八時午前二時午後二時頃が知死期である。④「知死期」を見よ。

◎知死期 死ぬる時期を豫知すること。

○おうへ お上の間即ち主婦の居間をいふ。

○善惡照す 善惡を照す燈明と、佛が善惡を照覽ましますをいひかけた。

○荒布の…一尺四寸 前文に「書置も認め死装束、脇差も荒布の荷へ巻込」とある。

○書置箱 後文、半兵衛の言葉に「親兄弟への書置も此状箱に入置けば、明日は早々届くべし」とある。

○白茶 淡い茶色。

○紅の血を見れば 毛氈の紅色から血を聯想し、若し出血を見たなら。

○差足 音の立たぬやうに、足をつまみだして地を履むこと。

○鰐の口 極めて危難な場合に喩ふ。「重井荷」下之巻に「あれ見返れば人聲の、我を奪ねて高津の町を、急ぎ通るゝ鰐口や」。

母に恨が有さうな、有なら言や聞ませう、「イ、エ、イ、エ、お慈悲深い姑御に、

何の、く」と詞ばかりにてかつばと伏して、泣居たり、「サ、己れが言ふ迄な

い、母じや人に何の恨、口手間入れる面倒な」と、小腕取て門口に引出す「此

身も遂に行、後にく」と囁きて目交に宿の、名残の涙、弱る心を見られじと門

口びつしやり店ぐはつたり、鳴るは六つか早初夜か、時も時分も六々に、胸はわ

けなき五々八々知死期近附くばかりなり、飽かぬ夫婦の生別れさすがの母も挨拶

なく、おうゑを立て奥の間の罪滅ぼしの鉦の聲、善惡照す御燭の火を見るよりも

居眠る下女、外に見る目も荒布の束中に隠せし一尺四寸、是が冥途の案内者魂

込む書置箱、地獄へ落ちるか極樂か、末は白茶の死装束、くるく包む毛氈も

早紅の血を見れば、死損いはせまいぞと一心は据はれども、暖簾一重彼方には

鋭き母の鉦の聲、胸に應へて、身も震ひ、踏所覚えぬ差足に、懸金外す手もわな

わなぞつと出たる、門口に、「イヤアお千世か」、「おいの」、「サア鰐の口を遁れた、

サアおじや」と手を引けば、「マア待て下さんせ、生中一度戻つて、此方様の口か

ら、退くぞ去るぞと言はれては未來までの氣がかり、此門口でたつた一言去らぬ

○此家を去る 宵庚申を受けて、その庚申(か)のえさ(の)香に近き、此家を去る(と)つづけた。

○輪廻 衆生は此處に死し彼處に生じ、地獄・餓鬼・畜生・修羅人間・天上の六道に輪轉すること車輪のめぐるが如きによつていふ。よつてまた輪廻安執といひ、輪廻を安執の意にいふ。

○羊の歩み 歩々死地に近づくことをいふ。

○聖耶經の偶に聖如麻陀羅(房者のご)聖羊就(屠所)歩々死地人命亦如是。

○三重 (既出)。三重の爲に出でて行くを略した。

○鶯の巢：時鳥 時鳥は巢を作らずして卵を鶯の巢の中に産み、鶯はそれとは知らずして孵化すといふ。「鶯築巢卷九、詠鶯公鳥一首并短歌の題にて、「鶯の生卵(か)ひ」の中に鶯公鳥(は)は(ま)ぎす、獨り生れて已(し)が父に似ては鳴かず、已(し)が母に似ては鳴かず。

○二八の年月 十六の歳月。半兵衛は二十二歳で八百屋伊右衛門の養子となり、十六年を經たのであるから、本年は三十七歳である。

○しでの田長 時鳥をいふ。

○血を吐く 時鳥の鳴き聲は血を吐く如く聞える。よつて斯くいふ。

○卯月 稻種を植ふ月の義。陰曆四月の稱。

○宵庚申 (既出)

○一文字 蕙。「日本釋名」に「ひもじは(き)蕙」の一字也也。「八百萬」「半」をこつづけた文節。◇これからの文は、青物の名にいひかけた、所謂青

と言ふて下さんせ、「ハテ愚痴な事ばかり、今宵は五日宵庚申、女夫連れて此家を去ると思へばよいわいの」、「ほんにそうじや手に手を取つて此世を去る」、輪廻を去る迷ひを去る、今日は最期の羊の歩みあ、しに任せて

八百屋半兵衛 道 行
女ばうおちよ

名残も夏の、薄衣、鶯の巢に育てられ、子で子にならぬ時鳥、我も二八の年月を、養ひ親に育てられ、子で子にならず振捨て、死に行身は人ならぬ、死出の田長か時鳥、同じ類の、女夫連れ肩に、掛けたる毛氈は鳴く音血を吐く姿かや、覺悟極めし足元も、影仄暗き薄曇、卯月五日の宵庚申、死なば一處と契りたる、其一言は庚申、参りの人に打紛れ、忍び出るも商賈の八百や萬を一文字に、半兵衛といふ名にも似ず、只根深くも思ひ詰む若菜心の突詰めて詞の義理にはじかみや、知者は惑はず勇者は懼れぬ、生れ付、さすがは武士の種ぞかし、千世も今度が三度目の嫁菜盛りもひねくれて、諸事を細な芥子辛子人の言ふ事木耳や、夫の親を手に疋豆、晝夜孝行つくつくし、仰せ背かぬ宮仕へ、氣の鶏冠菜な姑に、芹

物語してある。これは悲慘な道行を寫すに過ぎぬ。題詞落であるが、當時の流行に従つたものである。紀海音作「心中二つ腹帯」には、「道行星の數と題して、星羅しの文である。これも面白くない。

○根深 葱をいふ。現今も關西地方では用ひてゐる。これに心根深くをいひかけた。

○若菜心 若菜に若き心ぞいひかく。

○知者は：懼れぬ 知者は理に明かなるが故に、能く理非曲直を辨じて心を惑はさぬ。愚者は道義を立てて守る所があるが故に、事に臨んで懼れぬ。論語子罕篇に「子曰、知者不惑、仁者不憂、勇者不懼」。

○嫁菜盛り 嫁菜に嫁盛りをいひかく。

○ひねくれて みるびて。

○細かな芥子辛子 細かに注意するといふ意に、芥子辛子は細粉であるから、それにいひかく。

○木耳 木耳屬の菌類。乾かして食用とする。これに聞いて服従する意をいひかけた。

○宮仕へ 宮中に仕へるこころ、轉じて仕官奉公の意にいひ、又親などに仕へるこにもいふ。

○とつさか さまかかりの(鶏冠菜)に、心の逆しまな意をいひかく。

○せり〜 芹々に、せびり〜(せがみ)の意の意をいひかく。

○ありの實 梨實。「條調菜」に「梨を無の義とするよりの反語也」。

○ふり 瓜を、ふりといへるは「枕草紙」などにもある。これに「ふち」(瀧)をまかせた。

芹いちり(1) 蔦られて、命も梨(2)やありの實の、谷川(3)ふりに身を投げ(4)ふ、今日(5)甘海音(6)に

ならふか(7)と心は有頂寒天(8)の、いつ出(9)葵(10)としもせねば(11)斯く成(12)蓮(13)でござんせう、何と

生薑(14)の身の果を、言(15)ふて、返らぬ、水路(16)の、姑(17)去り(18)で殺(19)したと、悪名(20)附けて世

の人の蔵(21)ませうがお笑止(22)と、悔(23)めば夫(24)は芋莖(25)の涙(26)なふ其方(27)さへ其如く悔(28)んで

たもるに此半兵衛(29)、年比日比(30)の御厚恩(31)送らで死ぬ(32)は人の屑(33)、罰(34)を被(35)らん恐(36)ろし」

と、酸漿(37)程(38)な血の涙(39)はらく、こぼせば走り(40)寄り、私も病者(41)な父様(42)を先へ送るが

菓菜(43)を、却(44)つて憂(45)き目を見(46)せまする、是も何故(47)相生(48)の松茸(49)故(50)と抱(51)き附(52)、木末(53)に

知らぬ松(54)の露(55)、落(56)ちて松露(57)になりやせん、あれ一群(58)れに聲(59)高く、下向(60)の衆(61)のぞめ

○有頂寒天 有頂天に寒天をいひかく。

○わつさび 山葵に、「わつさり」をいひかく。

○説經 説經節。おにはす「鬼蓮」の異名。池澤中に生じ、葉は蓮に似て大である。この文は、水は流れて去つて返らぬ意から、「返らぬ水」を水路にいひかけた。又露の臺「たう」を露の姑といふから、「姑去り」で「いひつづけた」。

○祭文 歌祭文の節。

○笑止 も「勝手」であらう。勝れた事の義から轉じて、變つた事、氣の毒、いたはしい事の意になつたであらう。

○隨喜 他人のなす功德善根を見て、これに隨同して喜ぶこと。の義。心から感謝すること。

◇姑の牌待に堪へかねて死なうとする夫婦が、死に臨んでもなほ姑を大切に思ふ。哀れは愈々深い。

○菓菜 水草の名。葉は楕圓形、夏に紫紅色の花を開く。若き葉は食用となる。

○松茸 男のものを意味する惡濁落。松の梢から落ちる露とは似て非なるもの故に、斯くいふ。

○松露 春夏の交、海邊又は砂地の松樹の下に生じる。球形で傘柄の區別なく、白色又は淡褐色の軟かた菌。この文は、夫婦の涙のしづくが落ちて、松露となるたうと聯想したのである。

○下向の衆 宵庚中に參詣して還つてゐる人たち。

○ぞめき歌 浮かれ騒ぐ歌。

○我が戀路は：名取川それぢや〜
當時の流行小歌に筆を加へたもの。この唄に似たものは、紀海音作、心中二腹帯第三、道行星の數の文中にも用ひてある。併せ見よ。

○雲の帯 白雲が帯に似て山の腰をめぐることに以て思ひがもや〜として、まづはり解けぬことにいふ。

○ならずと 飲むことならずとも、飲めなくとも。

○ちよきりこつきり 形姿など丁度頃合なるさまをいひ、小さくて愛らしきを擬めた詞。近松作「今宮の心中」下之巻に「ちよきりこつきり小女房、花の様なる和子を儲けて」。

○ぬめる ぬらくらする。なまめき、ぐにや〜する。易林本「節用集」に「怒着ぬめる」。

○名取川 歌枕であつて、陸前國名取郡を流れる川。以て名を取る、浮名を流すことにいふ。

○辻占 辻に居て往來の人の言葉聞き、それによつて事の吉凶を判断すること。

○情銳に 殺氣立つをいふ。

○物しん〜たる 四面寂しして夜色沈々たる。

○寺町 大阪市天王寺區下寺町。

○法界無縁 法界の生類中、渡度すべき縁故の無い者。法界とは一切衆生色心の全體をいひ、宇宙一切萬有は悉皆法界内にある。こゝは法界無縁の衆生を勸誘進導して渡度し給ふ意で、「勸進所」と續けた。

○勸進所 大阪市天王寺區生玉馬場先生玉神社の東北にあつた奈良大佛殿勸進所。勸進所とは、

き歌見附られじと影隠す、我が戀路は糸なき三味よ、何の音もせで待ち明かすそれぢや〜、見れば思ひの雲の帯〜、さすぞ杯、ならずと一つ參れ、否とおしやるに、こちやも、それぢや〜、そうさんせ、それぢや〜、しかもよいこの、情盛りにちよきりこつきり小女房の、腰も撓へてやつくるり、くるりや〜やつくるりとぬめらしやんすは、二人が外に、名取川、ヲ、それ二人と二人が名取

それぢや〜」それ行き過し」と立出て、「今の小歌の一節に二人と二人が名取

川、ヲ、それそれぢやと唄ひしは己と其方が名取川、辻占がよい此方へ」と勇む

は男の彌猛心、ア、嬉しい」と引連れて、共に急ぐは女氣の情銳に人絶へて、

物しん〜たる、寺町を死にに行く身も暫らくは、ここ生玉の馬場先に法界、無

縁の勸進所無明能化の門前に、念佛を、便り辿り寄る「なふお千世、心隨萬境轉

と聞時は、心は境界に隨がつて轉じ變る、其方も千世といふ名を、風覺冷薫信女

と改め、我も八百屋半兵衛を露秋禪定門と改め、息の有内より早亡き人の數に入

れば、死後の身體の置所も俗縁を離れ、寺の庭でと思へ共門開かねば力なし、爰

は奈良の東大寺大佛殿の勸進所、先年了、海和尚衆生濟度の説法を、此所に説き始

佛寺に安進する金鐘などを、諸人から募集する所をいふ。

○無明能化 菩提の道に暗く、煩惱によつて迷苦にある衆生に、教法を説いて化益する佛。

○念佛 半兵衛は淨土宗の信者なれば、念佛を唱へたのである。

○心隨萬境轉 祖師の道いへる五言四句偈中の一句である。景德傳燈錄卷二に、「心隨萬境轉、轉處皆能隨、隨流認得性、無所遷復無憂。」

○境界 境遇といふ程の意。

○亡き人の數に入れれば 戒名(諡號のこゝ)を附けたからかくいふ。

○衆生濟度 迷界にさまよへる諸の生物をして、生死の海を度らしめて、佛果の岸に到らしめること。

○遷化 教化を他土に遷す義。以て菩薩・法師などの死去することをいふ。

○過分 身に餘つて悉く思ふこと。

○由ない者に連添うて つまらぬ夫に連添うて、夫の身の因果を其方にまでも累を及ぼすこと。

○諦めよい 諦めがよい。

○半鐘が鳴る鐘が鳴る 寺々で晨朝のお勤めの半鐘が鳴る鐘が鳴る。

○玉葛 「和漢三才圖會」卷九十六に「玉葛其蔓引地、葉似忍冬葉而厚、春開小花、色青綠可食」。この文は、玉の縹(命をいふ)を玉葛にいひかけた。そして玉葛は蔓草なれば、「夫に纏ひし其の縁語をいひつづけた。

め今遷化の跡迄も、我親は講中の第一にて由緒有所なれば、最期を爰と思ひ寄る、但望みも有や」と問へば、「なふ死ぬる身に何の望み、水の中火の中でも先の世迄も此方様と、女夫に成て居る所を、見立て死んで下さんせ」と、さめく歎けば「ヲ、過分な、此書置にも書く通り、養子に成て十六年此方、十方旦那の機嫌を取、際有日には町中を振賣し、元は僅かな八百屋棚、今では人に少々の金貸す様に儲け溜めても、辛い目ばかりに日を半日心を伸ばす事もなく、死なふとせしも以上五度、恨有中にも其方に縁組み、せめての憂さを晴せしに、それさへ添はれぬ様になり死ぬる身に迄成下る、由ない者に連添ふて半兵衛が身の因果、其方に迄振舞ひ、在所の親仁姉御にも悲しい事を聞すと思へば、此胸に鏝をかけ肝を猛火で熬る様な、エ、口惜しい」と拳を握り、膝に押附身を震はし、涙はら朝露につれて、流るゝばかりなり、あれ又愚痴な事ばかり在所の父様姉様は、此方様より諦めよい、水杯の其上に門火迄焚かれしは、生きて再び戻ると私に意見の暇乞、其愚痴な事言ふ手間で早ふ殺して下さんせ、アレ〜三方四方に半鐘が鳴る鐘が鳴る、人の來ぬ間に來ぬ間に」と急ぐ最期の玉葛、夫に纏ひ泣沈む、

○な思はれそ 思ひなさるな。

○一蓮托生 死後諸共に同一蓮華の上に生れること。以て一處に在生して離れぬことゝの意にいふ。

(既出)

○観念 覺悟又は諦めの意。

○不覺 未練。心残り。

○西向 極樂淨土は、この娑婆世界より西方にあるから、其の方に向くのである。「阿彌陀經」に「從是西方過十萬億那由其他世界、名曰極樂」。

○光明遍照 攝取不捨 念佛宗ではこれを攝受(せふやくけ)と稱して、最も唱へられてゐる。「觀無量壽經」に「無量壽佛光明、遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」。その意は、無量壽佛の光明はあまなく十方世界を照覽し給ひ、稱名念佛を唱へる衆生を悉く佛の光明の中に攝すべ取つて捨て給はず、皆彌陀の淨土に往生せしめ給ふとの意。

○日の目も見せず 日の光も拜ませず。萬葉集卷一、柿本朝臣入鹿の歌に、神風に、いぶき懸はし、天雲を、日の目も見せず、常闇に、覆ひたまひて。

○おの翼を比べながら 「おの」は「おのれ」に同じ。八咫の鳥をさす。「翼を比べ」は、雌雄が翼をなべて飛ぶ意。以て男女の契りの脆じきに譬ふ。白居易の「長恨歌」の詩句に「在天願作比翼鳥」在地願爲連理枝。

○八聲の鳥 鶯をいふ。鶯は夜明け方に屢々鳴くから八聲といふ。八(や)は羽の義で、八千代やちまなどいふ八も同じ語。この文は、鶯が鳴いて夜

「ヲそれよ」由なき悔み、最早互に親の事兄弟の事言ひ出すまい、必ず其方言ひ出しやんな、いざ此方へ」と毛氈を土に打敷「なふお干世、此毛氈を毛氈とな思はれそ、二人が一所に法の花、紅の蓮と觀すれば、一蓮托生頼有、親兄弟への書置も此状箱に入置けば、明日は早々届くべし、サア」観念最後の念佛意りやるな、今が最期」とずはと抜く、一尺四寸「親重代我身を切れとて譲りはせじ、甲斐なき半兵衛が身の果や」と昔思へば手も震ひ、不覺の涙堰き敢へず、心覺の西向に干世は合掌手を合せ、光明 遍照十方世界念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛彌陀佛」の聲より早く引寄せて、脇差咽に押當る、「なふ待てたべ待たしやんせ」と、身を摺退けば半兵衛「待てとは未練な、刃物を見て俄に命惜しなつたか、卑怯者め」と睨め附れば、「いや」未練も卑怯も出ぬ、今の回向は我身の回向、可愛やお腹に五ツ月の男か女か知らねども、此子の回向して遣りたい、嬉しや壯健で産んだらばどうして育てふ斯うせうと、案じ置は皆徒事、日の目も見せず殺すかと、思へば可愛ふござんす」とかつぱと伏して泣入れれば、男も聲を廢り上、「己も何の忘れふぞ、もし言ひ出したら其方の泣きやらふ悲しさに、黙つて

「ヲそれよ」由なき悔み、最早互に親の事兄弟の事言ひ出すまい、必ず其方言ひ出しやんな、いざ此方へ」と毛氈を土に打敷「なふお干世、此毛氈を毛氈とな思はれそ、二人が一所に法の花、紅の蓮と觀すれば、一蓮托生頼有、親兄弟への書置も此状箱に入置けば、明日は早々届くべし、サア」観念最後の念佛意りやるな、今が最期」とずはと抜く、一尺四寸「親重代我身を切れとて譲りはせじ、甲斐なき半兵衛が身の果や」と昔思へば手も震ひ、不覺の涙堰き敢へず、心覺の西向に干世は合掌手を合せ、光明 遍照十方世界念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛彌陀佛」の聲より早く引寄せて、脇差咽に押當る、「なふ待てたべ待たしやんせ」と、身を摺退けば半兵衛「待てとは未練な、刃物を見て俄に命惜しなつたか、卑怯者め」と睨め附れば、「いや」未練も卑怯も出ぬ、今の回向は我身の回向、可愛やお腹に五ツ月の男か女か知らねども、此子の回向して遣りたい、嬉しや壯健で産んだらばどうして育てふ斯うせうと、案じ置は皆徒事、日の目も見せず殺すかと、思へば可愛ふござんす」とかつぱと伏して泣入れれば、男も聲を廢り上、「己も何の忘れふぞ、もし言ひ出したら其方の泣きやらふ悲しさに、黙つて

明けを告げ、以て半兵衛夫婦の最期を急がすの意。
○十念（既出）

○ぐつと刺す 半兵衛がお千世をぐつと刺す。

○亂るる 呼吸も亂れ、手先も亂るる。

○四苦八苦 生老病死を四苦といふ。これに
娑婆苦、愛別離苦、求不得苦、五陰盛苦を加へて
八苦といふ。四苦八苦は、吾人が生涯を通じて必ず
受ける苦痛であつて、「涅槃經」に説いてある。轉じて、
四苦八苦を至極の苦痛の意にいふ。

○三九の郡内編 お千世の二十七歳、算崩
し（三筋づつ）縦横に石積みにした鶴の郡内編をい
ひかけた。

○郡内編 甲斐國南、北郡留部を郡内といひ、其
の地より産出する絹絹の名。「和漢三才圖會」卷二十
七に「郡内絹」を出於甲州郡内、絹厚而細、又有力地
文如「菱者」多縱横縹（しほ）也、京師織績者、名「京
郡内」絲細美而軟弱。郡内は貞享から享保に亘つて
最も流行し、暗の衣裳にしたものである。

○かかへ 抱帯（かかへおび）の略。婦人のしご
き帯。○抱帯を見よ。

○鳩尾 「水おろをいひ、胸下に當り、身體の急
所である。ここの文に、半兵衛は切腹する前に「抱
帯を二つに押し、鳩尾と臍の二所、うんと締めて
は引括り」とあるが、これは力を入れるに便な爲に
したのか。思ふに、紀海音作「心中二つ腹帯」第
三に、お千代が抱帯を引裂いて半兵衛が腹を切つた
疵口を察めた事になつてゐるを、近松が斯く改作
したので、馬脚を現はしてゐるのであらう。

居た」とばかりにて、一度にわつと聲をあげ前後、正體位叫ぶ、己も翼を比べな

がら人の最期を急ぐ成、八聲の鳥も告げ渡れば、「サア」夜明に聞かない、明日

は未來で添ふものを、別れは暫しの此世の名残り、十念追つて一念の聲諸共にく

つと刺す、咽の呼吸も亂る、刃、思ひ切ても四苦八苦手足をあがき、身をもがき、

卯月六日の朝露の草には置かで毛氈の、上に亡き名を留めたり、年は三九の郡内

縞血潮に染みて紅の、衣服に姿掻い繕い妻の抱帯を二つに押し、諸肌脱いで我と

我鳩尾と臍の二所、うんと締めては引括り、脇差逆手に取持て二首の辭世に

斯くばかり古急を捨てばや義理も思ふまじ、朽ちても消へぬ名こそ惜しけれ、

「遙々と、濱松風に、揉まれ来て涙に沈むざざんざの聲、三國一じや我は佛に成

りますます」、しやんと左手の腹に突立て右手へくはらりと引廻し、返す刃に笛搔

切り、此世の縁切る息引切る、晨朝過ぎの勸進所目刮り、門番が、見附て

○古へを捨てばや：名こそ惜しけれ お千世の辭
世の歌。（見索引）

○遙々と ざざんざの聲 半兵衛の辭世の歌。（見索引）

○三國一じや 日本支那天空にも比すべきものなきをい
ふ。ここの文は、當時酒宴の席などでよく講つた流行小歌、「三

國一じや、濱松の音はざざんざ、酒になりすまいだ、しやんしや
ん」を改作したのである。
○笛 喉笛のぶふえ。
○晨朝 朝の勸行の時で、卯の刻午前六時頃。

○濱松風枝を鳴らさぬ 靜謐太平なるをいふ。語出「高砂」に「四海波靜かして、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御化なれや」。

○類稀なる死姿 あつはれ穢き前期を遂げた死姿を採めたのである。

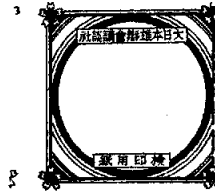
「心中しんぢゆうヤレ心中しんぢゆう、死んだしんだ」と呼ばはる聲吹き傳へたる濱松風、枝を鳴らさぬ君が代に、類稀るいひまれなる死姿しじすがた語りて、感ずるばかりなり

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋一丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 代表 五六二〇〇番
牛込(34) 六二〇〇番

(本製地海天)